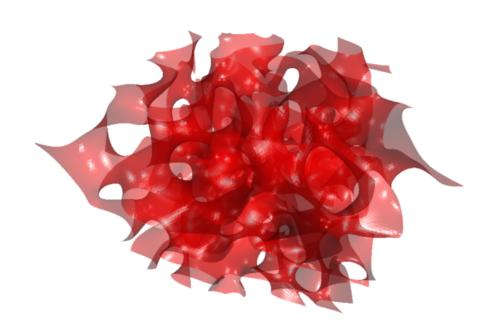
# GLSC3D (Ver. 3.0.0) Manual

構想・制作・監督: 秋山 正和 北海道大学 電子科学研究所



制作 (Ver. 2.2.1 以降): 舘入 数磨 \*1, 須志田 隆道 \*2, 小林 亮 \*3 \* 北海道大学大学院 理学院 数学専攻, \*2 北海道大学 電子科学研究所, \*3 広島大学 数理分子生命理学専攻

制作 (Ver. 2.2.1 まで): 平芳 悠人, 岡本 守 北海道大学 理学部 数学科

# 目次

1		はじめに	8
	1.1	GLSC とその歴史	8
	1.2	GLSC の長所・短所	9
	1.3	GLSC3D の開発まで	12
	1.3.	.1 X Window System の限界	12
	1.3.	.2 OpenGL と GLUT の使用	12
	1.3.	.3 GLSC らしさと OpenGL らしさ	13
	1.3.	.4 GLSC3D の赤ちゃんの誕生	14
	1.4	GLSC3D の開発	14
	1.5	GLSC3D の設計哲学	15
2		GLSC および GLSC3D Ver2.x からの変更点及び注意点	17
	2.1	GLSC からの変更点	17
	2.1.	.1 Fortran 言語をサポートしていない	17
	2.1.	.2 最終の描画スタイルの変更	17
	2.2	GLSC3D Ver2.x からの変更点	19
	2.2.	.1 OpenGL の最新規格への追随	19
	2.2.	.2 ウインドウライブラリを FreeGLUT から SDL への変更	19
	2.2.	.3 フォント埋め込みの廃止, フォント指定関数の変更, 日本語などの Unicode 文	
		字への対応	19
	2.2.	.4 ウィンドウのサイズ変更・最大化と Apple Retina Display の対応	20
	2.2.	.5 ワイヤーフレームとサーフェイス塗りつぶしの引数の変更	20
	2.2.	.6 2D の描画順の変更	21
	2.2.	.7 g_box_2D, g_box_3D(_core) 関数の仕様変更	21
	2.2.	.8 g_area_color 関数の仕様変更	21
	2.2.	.9 マーカーの種類の追加	21
	2.2.	.10 スムーズシェーディング用の関数,構造体を引数とする関数の追加	21
	2.2.	.11 その他	23
	2.3	GLSC3D の注意点	24
	2.3.	.1 物体の透明化における注意点 (Ver1.x をお使いの方へ)	24
	2.3.	.2 物体の透明化における注意点 (Ver1.x 以降 をお使いの方へ)	25
3		動作環境とその構築	27
	3.1	動作環境	27
	3.2	動作環境の構築	27

	3.2.1	Mac OS X の場合	27
	3.2.2	Ubuntu の場合	29
	3.2.3	CentOS の場合	30
	3.2.4	Windows の場合	31
4	GLS	SC3D <b>の関数</b>	33
4	.1 制御	即関数	38
	4.1.1	$\texttt{g\_init}$	38
	4.1.2	g_init_core	39
	4.1.3	g_init_light	41
	4.1.4	g_init_light_core	41
	4.1.5	g_disable_light	41
	4.1.6	g_scr_color	42
	4.1.7	g_cls	42
	4.1.8	$g\_finish \dots \dots$	43
	4.1.9	g_sleep	43
	4.1.10	g_capture_set, g_capture	43
	4.1.11	g_enable_highdpi	44
	4.1.12	g_set_antialiasing	44
4	.2 補助	力関数	45
	4.2.1	g_key_state, g_input_state	45
4	.3 スク	<b>ㅠール関数</b>	47
	4.3.1	g_def_scale_2D	47
	4.3.2	g_def_scale_3D	48
	4.3.3	g_def_scale_3D_fix	51
	4.3.4	g_vision	52
	4.3.5	g_sel_scale	55
	4.3.6	g_clipping	55
4	.4 属性	<b>性コントロール関数</b>	56
	4.4.1	g_marker_color	56
	4.4.2	g_marker_size	56
	4.4.3	g_marker_radius	56
	4.4.4	g_marker_type	57
	4.4.5	g_def_marker	58
	4.4.6	g_sel_marker	58
	4.4.7	g_line_color	60
	4.4.8	g_line_width	60
	4.4.9	g_line_type	60

4.4.10	g_def_line	61
4.4.11	g_sel_line	62
4.4.12	g_area_color	63
4.4.13	g_def_area_2D, g_def_area_3D	64
4.4.14	g_sel_area_2D, g_sel_area_3D	64
4.4.15	g_text_color	65
4.4.16	g_text_font_core	65
4.4.17	g_text_size	65
4.4.18	<pre>g_def_text, g_def_text_core, g_sel_text</pre>	66
4.5 描画	<b> </b>	67
4.5.1	g_marker_2D, g_marker_3D	67
4.5.2	g_text_standard	68
4.5.3	<pre>g_text_virtual_2D, g_text_virtual_3D</pre>	68
4.5.4	g_move_2D, g_move_3D	69
4.5.5	g_plot_2D, g_plot_3D	69
4.5.6	g_box_2D	70
4.5.7	g_box_3D	70
4.5.8	g_box_3D_core	71
4.5.9	g_box_center_2D	72
4.5.10	g_box_center_3D	72
4.5.11	g_box_center_3D_core	73
4.5.12	g_sphere_3D	75
4.5.13	g_sphere_3D_core	76
4.5.14	g_ellipse_3D	77
4.5.15	g_ellipse_3D_core	78
4.5.16	g_prism_3D	80
4.5.17	g_prism_3D_core	81
4.5.18	g_cylinder_3D	83
4.5.19	g_cylinder_3D_core	84
4.5.20	g_cone_3D	86
4.5.21	g_cone_3D_core	88
4.5.22	g_pyramid_3D	90
4.5.23	g_pyramid_3D_core	91
4.5.24	g_arrow_2D	93
4.5.25	g_arrow_3D	94
4.5.26	g_arrow_3D_core	96
4.5.27	g_triangle_2D	98
4.5.28	g triangle 3D	99

4.5	0.29	g_triangle_3D_core	100
4.5	5.30	g_triangle_3D_smooth	101
4.5	5.31	g_triangle_3D_smooth_core	102
4.5	5.32	g_fan_2D	103
4.5	5.33	g_fan_3D	104
4.5	5.34	g_fan_3D_core	105
4.5	6.35	g_circle_2D	107
4.5	5.36	g_circle_3D	108
4.5	5.37	g_circle_3D_core	109
4.5	5.38	g_polygon_2D	111
4.5	5.39	g_polyline_2D	112
4.5	5.40	g_polyline_3D	113
4.5	5.41	g_rectangle_3D	114
4.5	5.42	g_rectangle_3D_core	115
4.5	5.43	g_data_plot_2D	116
4.5	5.44	g_data_plot_3D	117
4.5	6.45	g_data_plot_f_3D	118
4.5	5.46	g_boundary	119
4.6	上位	立関数	120
4.6	5.1	g_contln_2D	120
4.6	5.2	g_contln_f_2D	121
4.6	5.3	g_bird_view_3D	122
4.6	5.4	g_bird_view_f_3D	123
4.6	5.5	g_isosurface_3D	124
4.6	5.6	g_isosurface_f_3D	125
5	Ver	rsion <b>の履歴</b>	126
6	おオ	うりに :	130
7	謝話	<b>∵</b>	130
8			131
8.1			131
8.2			131
8.3		— , , , , , ,	131
8.4			132
8.5			132
8.6	Fut	ture Works	132

### 1 はじめに

本章では GLSC の歴史や GLSC3D の開発に至る経緯などを詳しく紹介します。手っ取り早く 使いたい方は本章を読み飛ばしください。

#### 1.1 GLSC とその歴史

GLSC とは、Graphics Library for Scientific Computing の略で、科学計算の結果をディスプレイ上に表示するための簡単なグラフィックライブラリです $^{*1}$ . GLSC は小林 亮氏、高橋 大輔氏、中野 浩氏、松木平 淳太氏によって開発されました。当時(1980 年頃)はコンピュータ環境こそ整っていましたが、その計算結果を可視化する汎用のソフトウェアが殆どありませんでした。そのような時代に、「ユーザーに出来るだけ負担をかけずに簡単に数値計算結果を可視化したい」という目的で GLSC は開発されました。今日では、計算結果を可視化するソフトウェアはgnuplot  $^{*2}$ を始め、Mathematica、MatLab $^{*3}$ など様々なものがあります。したがって「GLSCを使わなければ、可視化はできないか?」と問われれば答えは No となります。しかしながら、今でも GLSC にはコアなファン $^{*4}$ が沢山います。では、どのような点が GLSC は優れているのでしょうか?

<sup>\*1 &</sup>quot;GLSC 小林 亮" と google 検索するか、http://www-mmc.es.hokudai.ac.jp/~masakazu/ を見てください

<sup>\*2</sup> http://www.gnuplot.info/

<sup>\*3</sup> Mathematica, Matlab は数式処理や簡単な数値計算もできるので、可視化ソフトというよりは「可視化もできる」 ソフトというべきですね。

<sup>\*4</sup> もっとも授業などで最初に習った言語はその後を引きずるので、その影響で仕方なくという方もいるでしょうが...

#### 1.2 GLSC **の長所・短所**

我々、数理科学者は現象と向き合い、数理モデルを作成しながら現象を理解することを生業としています。そして構成された数理モデルは、解析的に解くことは困難です。したがって、解を表示したりするためには、数値計算を行いのその結果を可視化するしかありません。この時多くの場合、数値計算のコードが先に出来上がります。次にそれをグラフィカルに表示するためにグラフィック用のコードを作成します。

ランダムウォークを例に取りましょう。次のページにランダムウォークを計算する C コードを貼りつけてあります。r[i] は i 番目の粒子の位置 (整数値)を示します。19 行目まで計算することによって,変数 r[i] の値が更新されます。計算の結果がうまく行われているかを確認するために、21 行目以降ではそれらを端末に表示するコードが示されています。試しに計算をしてみましょう。結果がグラフィカルに表示されていないので、わかりにくいと感じるはずです。そこで多くの場合、この結果を何らかの可視化ソフトを用い可視化します。先にも示したように、Freeで手に入り、マニュアルも豊富に存在するということで、gnuplot は最近人気です。先の実行ファイルに対し、リダイレクション ">"を用いることで、計算結果を他のファイルに記録することができます。gnuplot にはこのデータを与えて可視化を行います。gnuplot は「与えられた座標に点を打つ」、「点どうしを先で結ぶ」、「鳥瞰図を作成する」など基本的な可視化を行うことができます。先の例では、端末での表示を見やすくするために計算結果に

----- Step = 0 -----

```
1 #include <stdio.h>
 2 #include <stdlib.h>
 3 #define
             N
                   (10)
 4 #define
             STEP
                   (100)
 5 int PlusMinus(void)
 6 {
      if(rand() < RAND_MAX / 2) return 1;</pre>
 8
      else
                           return -1;
 9 }
10 int main(void)
11 {
12
               i, r[N],i_time;
      int
     //Initialize
13
      for(i = 0; i < N; i ++) r[i] = 0;
14
15
      //Time Loop
      for(i_time = 0;i_time < STEP;i_time ++)</pre>
16
17
      {
         //Calc
18
19
         for(i = 0;i < N;i ++) r[i] += PlusMinus();</pre>
20
         //Print
         printf("----\n",i_time);
21
22
         for(i = 0;i < N;i ++) printf("%3d ",r[i]);</pre>
23
         printf("\n");
24
      }
25
      return 0;
26 }
計算結果
----- Step = 0 ------
 1 1 -1 1 -1 1 1 -1 -1
----- Step = 1 ------
 2 0 -2 2 0 0 0 0 0 0
----- Step = 2 -----
----- Step = 98 -----
-5 -15 13 1 -7 15 -3 1 7 -3
----- Step = 99 -----
-4 -16 12 2 -8 14 -4 0 6 -2
```

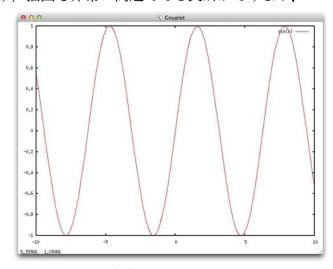
などと表示をしていましたが、gnuplotではこのような文字列は受け付けません。よって、多くの場合、gnuplotに適するように計算結果をフォーマットし直す必要があります。この例でもわかるように、数値計算のコードを書いた後に可視化のコードを書くということが、多くの現場で行われていることでしょう。

この方法には大きな欠点があります.それは「リアルタイムに可視化できていない」という問題です.先の例では,数値計算はほんの一瞬で終わりますが,中には長時間の計算を必要とする場合もあります.そのような場合,「計算と同時に可視化もできたらいいのに」と多くの人は思うことでしょう.もちろん,gnuplot では popen 関数を用いて,C言語から直接 gnuplot を呼ぶこともでき,この目的を達成出来ます.しかしながら,数値計算のコードよりも可視化のコードの部分が肥大化するという問題がよく起こります.この問題も,できるだけコードが肥大化しないように,プログラマが適切に関数を作ればよいのですが,C言語から gnuplot を簡単かつスマート呼べるようなツールはないようです\*5.GLSC は C言語から非常に簡単に呼ぶことができるように設計されており,数値計算をしながらリアルタイムに可視化を行うことが可能です.また,GLSC は内部で X Windowsy System\*6を使用しており,描画も非常に高速である長所があります.

その一方で、GLSC には短所もあります。 例えば、gnuplot などの汎用ツールは次のように端末に打つとグラフを出します。

#### gnuplot> plot sin(x)

グラフが出るだけでなく、軸、目盛り、関数の名前など様々な情報を付加してくれます。 これは gnuplot が内部的に適切に処理をしてくれているお陰です。しかしながら、GLSCにはそのようなものはありません。そのような付加情報を出したければユーザー自身が直



接コードを書かねばなりません。多くの方はこのような点を挙げ「GLSC はそのような機能がついていないのがやだ」、「自分で書くのが面倒だ」と批判的になります。確かにそのような側面はありますが、逆に言えば「なんでもできる」ということになります。やや脱線しますが、開発者の小林亮氏から次のような話を聞いたことがあります。

「GLSC は確かになんでもはやってくれない、でも自由度が高い分、「ああしたい」、「こうしたい」 という痒い所に手が届くんだ」

なるほど、含蓄のあるお言葉です.

どんなツールにも短所と長所があります。ですから "GLSC でないとできない事" というのは、今日ないでしょう。しかしながら、GLSC は "数値計算のプロ" たちが、自身の経験から使いやすい形にまとめた関数の集大成となっています。つまりメインの数値計算のコードに "程よい程度の困難さで、ユーザーの思い描く自由なグラフィック発想を追加できる" という点が GLSC の長所なのです。

<sup>\*5 2014.6.4</sup> 原稿作成時時点

<sup>\*6</sup> http://www.x.org/

#### 1.3 GLSC3D **の**開発まで

長所と短所の話をした後ですが、GLSCには致命的な問題がありました。それは3次元空間の描画を扱えない\*7ということです。GLSC開発当時、3次元計算を行うことは当時のスパコンでも大変でしたし、ましてや数値計算と同時に3次元の可視化をする必要もありませんでした。しかしながら、今日ではそのような話は普通に聞きます。作者は博士論文作成時\*8、非常に多くの3次元の数値計算を行っていましたが、GLSCでは可視化ができず\*9、泣く泣く他の描画ツールを使った覚えがあります。その描画ツールはまったく痒い所に手が届かず、苦い経験をしたものです。その後も様々な文献を読み漁ったり、人に聞いたりして、使いやすそうな3次元可視化ツールを模索しました。数年模索をしましたが、結論から言えばそのようなツールはない、もしくはあっても非常に高い\*10ということでした。しかもそのようなソフトは、予想されたように、痒いところに手が届かなかったり、描画が非常に遅いという欠点もありました。"3次元の良い描画ツールがないために、研究が滞る"ということを避けるためにも、何らかの手を打たなければならない。そこで、筆者はGLSC3Dの開発に着手しました。

#### 1.3.1 X Window System の限界

GLSC3D とはその名の通り、GLSC の 3 次元への拡張バージョンのことです。GLSC3D の基本的な思想や設計方針は GLSC と同じになるように設計されるべきです。このため、開発当初は新たな 3D の新関数を GLSC に追加する形で進められました $^{*11}$ . しかしながら、GLSC は内部的に X Window System を Call するため、新たに追加できる 3D 機能は X Window System の許す制限までということになります。X Window System は優れたライブラリですが、3 次元の描画関数が乏しく、この路線での拡張は原理的に不可能と判断しました。そこで、他の描画ライブラリの使用を検討しました。

#### 1.3.2 OpenGL と GLUT の使用

3次元の描画ライブラリとして有名なのは、やはり OpenGL(Open Graphics Library)\*12でしょう。DirectX\*13というライブラリも有名ですが、Windows 上でしか動かないので問題です。OpenGL は様々な環境で動作すること、描画が高速であること、そしてその名の通りオープンなAPI(Application Program Interface) であることから、GLSC3D の構築には最適です。

OpenGL はグラフィック専門の API なので、ウインドウを画面に出したり、マウスやキーボー

<sup>\*7</sup> もちろん鳥瞰図や、等値面を描く関数はありますが...

<sup>\*8 2010</sup> 年の冬頃

<sup>\*9</sup> もちろん、3次元データから2次元の断片データをいくつか作り、可視化をすることは出来ましたが...

<sup>\*&</sup>lt;sup>10</sup> AVS という有名な可視化ソフトがあります。教育向けの一番安いのでも 15 万円以上はします。Mathematica も 20 万円はします...

 $<sup>^{*11}</sup>$  その名残が GLSC3.8 世代にて追加された g\_contln\_3d などです

<sup>\*12</sup> http://www.opengl.org/

<sup>\*13</sup> http://ja.wikipedia.org/wiki/Microsoft\_DirectX

ドのようなデバイスから操作を受け付けるためには他のライブラリを使用する\*14必要がありま す. それが GLUT(OpenGL Utility Toolkit)\*15です. GLUT はこのような OS 間でのデバイス の違いの差も吸収してくれます。そこで OpengGL でインタラクティブなグラフィックプログラ ムを制作するといえば、大抵は GLUT も使用することになります.

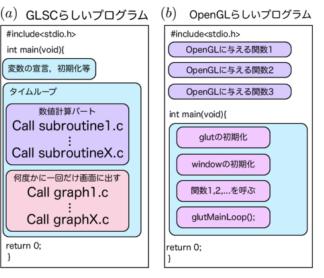
実は GLUT は 1998 年に発表された Version 3.7 以降整備が行われなくなってしまいました. それでは困るということで、いくつかの団体 (OpenGLUT\*16, FreeGLUT\*17) が GLUT と互換 性のある新たなライブラリを開発してきました。 どちらの団体でも良かったのですが、freeGLUT のほうが作者の開発環境である MacOS と相性がよいので、GLSC3D の開発では freeGLUT を 採用しました $*^{18*19}$ . これにて、GLSC3D の開発に必要な土台は準備出来ました。あとは、どの ように実装するかという問題が残されました.

#### 1.3.3 GLSC らしさと OpenGL らしさ

先にも説明したように、GLSC は数値計算 屋さんの作った描画ライブラリです。筆者は 何かプロジェクトをスタートさせる時、数値 計算のプログラムパートに精力を注ぎ、次に グラフィックパートを作成します\*<sup>20</sup>. この 時, 数値計算を行いながら, 可視化を行うわ けですから,必然的にプログラムは (a) の様 な構成になります。ここではこのようなプロ グラミング構成を GLSC らしいプログラミ ング構成と定義します\*21.

さて、OpenGL のサンプルプログラムが

#include<stdio.h> int main(void){ 変数の宣言, 初期化等 タイムループ 数値計算パート Call subroutine1.c Call subroutineX.c 何度かに一回だけ画面に出す Call graph1.c Call graphX.c return 0;



載っている教科書等を一度読んでみてください. きっとプログラム構成は (b) のようになってい ると思います。すなわち OpenGL や GLUT の関数の準備を行い、それらを main 関数内で呼ぶ ような構成です。そして一番のポイントは glutMainLoop 関数が呼ばれているということです。 glutMainLoop はコールバック関数と呼ばれる特殊な関数です。この関数は「プログラムの実行 中、何かが起こった時に」登録された関数を呼び出す(呼び戻す)ことができるような関数です. 具体的にいえば、マウスなどで 3D グラフィックを回転させたい時がありますが、そのようなイ ベントが発生した時に(つまりマウスの動きを察した時), OpenGL 関数に対して「再描画せよ」

 $<sup>^{*14}</sup>$  このように書くと GLSC3D ではマウスやキーボードを使ってインタラクティブにグラフィックを行うことができ そうですが、現時点 (2014.6.5) ではそのような関数は未実装です。その後 Ver2.2.1 で実装されました。

 $<sup>^{*15}</sup>$  http://www.opengl.org/resources/libraries/glut/

<sup>\*16</sup> http://openglut.sourceforge.net/

<sup>\*17</sup> http://freeglut.sourceforge.net/

<sup>\*18</sup> 何年か後に OpenGLUT 陣営が勝っていれば、それに合わせてプログラムを更新します...

<sup>\*19</sup> FreeGLUT はいくつかの問題があることがわかり、Ver3.00 からは SDL に移行されました.

<sup>\*20</sup> こう言うとグラフィックを疎かにしているようですが、グラフィックも綺麗にしないとインパクトのある講演はで きませんからね... どっちも大事です.

<sup>\*21 「</sup>らしさ」を強要しているわけではありません。自由な発想に基づきプログラムをしてください。

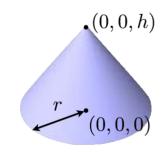
と命令するのです。OpenGL はグラフィックをプログラミングするために適した API ですので、このようなプログラミング構成になるのは至極当然のことです。私は今まで仕事柄、多くの人のプログラムを読んできましたが、OpenGL らしいプログラミング構成の中に、何とか数値計算のコードを潜り込ませ、実行させているのをよく見かけます。しかしながら、上記のように整理すればわかるように、このような OpenGL らしいプログラミング構成と GLSC らしいプログラミング構成とは相容れない関係なのは明白です。OpenGL の参考文献に載ってるいるような「サンプルを数カ所変更すれば GLSC3D が完成!」というわけにはいかなかったからです。GLSC3D の開発は困難を極めました。

#### 1.3.4 GLSC3D **の赤ちゃんの誕生**

GLSC らしいプログラミング構成となるように、どのように OpenGL の関数を呼び、GLSC3D の設計をすればよいのかは長らく未解決でした。ある時、研究室の樋口亮君ととある研究を行う中で、彼の OpenGL のプログラムをぼーっと見ていました。その時、このコードの一部に、これを解決するような構成方法を発見しました\*<sup>22</sup>。筆者はこのコードと発見こそが GLSC3D 開発に大きく貢献したと思います。この場を借りて、樋口君には感謝の意を捧げます。

#### 1.4 GLSC3D **の開発**

GLSC3D の根幹部分は先が見えたので,あとは実際の描画関数の設計を行うことを考えます.例えば,円錐を描画する関数 DrawCone を考えます.円錐の底の中心が原点 (0,0,0),尖った先端を (0,0,h),円錐の半径を r として円錐の描画関数を設計することを考えます.DrawCone の引数\* $^{23}$ は h,r ということになります.当たり前ですが,この状態で描画される円錐はいつも底の中心が原点となっていますし,傾いた円錐とい



うのも描画できません. このような時、3D オブジェクトに対して平行移動や回転などを施してやれば目的を達成できます. しかしながら DrawCone は呼ばれた時点で、底の中心が原点となるようなものしか描画できません. どうすればよいでしょうか. 一つの戦略は DrawCone 関数の引数を増やし、円錐の底の座標や傾きなどを追加し、DrawCone の内部設計を変える方法です. でも、これは開発者側はちょっと面倒なプログラミングをせねばなりません.

二つ目の戦略は OpenGL に用意されている

#### glPushMatrix, glPopMatrix, glTranslatef, glRotatef

などの関数を使うことです。詳細は他書\*<sup>24</sup>に委ねますが、簡単にいえば標準的な位置・方向の 3D オブジェクトに対して平行移動や回転などを施して、**描画時**に傾かせたり、移動させて見せたりする方法です。この方法はグラフィックスをメインとするようなプログラミング作成の際にはよく使われる手法です。しかしながら、GLSC3D はあくまでも数値計算をメインとするような人向

<sup>\*22</sup> 樋口君,会社員になっても元気か?ついに開発したぞ!

<sup>\*</sup> $^{23}$  引数(ひきすう)と読みます.例えば関数 f(x,y) なら x,y が引数です.とある学生がこの漢字を読めなかったもので...

<sup>\*&</sup>lt;sup>24</sup> OpenGL プログラミングガイド 原著第 5 版など

けのツールです。したがって、この手のやり方をユーザに強制するのはいかがなものか?ということになりました。そこで、GLSC3Dでは戦略1をとりました。戦略1は関数の引数が多くなり、開発に手間がかかるという欠点はありますが、3Dオブジェクトの描画を任意の位置や方向に制御可能です。引数が多いなと感じる方もいるとは思いますが、試行錯誤の末、削りに削ったものです。もし、気に入らなければ、引数の少ない描画関数を自身で設計することも可能です。

このような経緯がありましたが、当面の問題は解決され GLSC3D の開発はスタートしました。

#### 1.5 GLSC3D **の設計哲学**

GLSC3D は GLSC と同じ設計哲学を有します。それはおよそ以下の様な設計哲学です。

#### 数値計算のコードを邪魔しない

先の述べたように、多くの場合数値シミュレーションのプログラムは、根幹をなす数値計算コードの部分が先に完成され、その後描画のパートが作成されます。したがって GLSC3D はもとの数値計算コードの部分に大きな変更を求めたり、後からの追加が困難であるように設計されてはなりません。したがって簡単な手続きで、GLSC3D のコードをもとのコードに埋め込めることができるように設計されるべきです。

#### 関数の引数は必要最低限にせよ

関数の引数は多ければ多いほど豊かな動作が可能です。しかしながら、関数の引数が多いと「この関数の引数はなんだっけ?順番はどうだったっけ?」という問題が発生し、マニュアルとにらめっこしなければなりません。したがって関数の引数は、「その関数の動作に支障きたさない範囲内で最低限のレベルまで減らす」ことが求められます。例えば球を描画する場合はどのように工夫をしても、中心座標と半径は引数として必要でしょう。したがって g\_sphere\_3D 関数はこのような引数を必須としています。一方で g\_sphere で球を描画していると、「ゴツゴツしているのでもう少しなめらかな球を描きたい、ワイヤーフレームで描きたい、etc...」といった欲望が出てくる場合もあります。そのような場合に備えて GLSC3D では、ほとんどすべての関数に添字"\_core"のついた上位版の関数を用意しています。例えば g\_sphere\_3D\_core は球面の分割レベル、面の三角形分割のレベル、ワイヤフレームにするかどうかなどを指定することができます(詳細は関数の説明を御覧ください)。GLSC3D では一般に関数 g\_A、g\_A\_core が存在する場合 g\_A は内部的に g\_A\_core を Call しています。

#### だからと言って構造体などで包まない

構造体を使えば、一つの構造体を関数に渡せばあたかも多数の引数を渡したことと同等のことが実現できます。しかしながら、この方法も結局「この関数の構造体のメンバーはなんだっけ?型の名前はなんだっけ?」という問題が発生し、マニュアルとにらめっこしなければなりません。そのようなことから GLSC3D では構造体を通して引数を渡すことをしません。もし「引数が多くて嫌だな...」と思われる場合は、ユーザー自身で構造体を作成し GLSC3D の関数をラッピングしてご使用ください.\*25

 $<sup>^{*25}</sup>$  とは言っても 3 次元の計算ツールなので、座標ぐらいは構造体にしたい気分です。そのうちリリースするかもしれません

#### ユーザーが自由に関数を設計できる

先に g\_sphere\_3D を例にしましたが、例えば「球面の北極部分を赤く、南極部分を青く、さらに赤道部分は緑にしたい」という欲望が出た場合、g\_sphere\_3D\_core ではもはや手におえません。GLSC3D は「ユーザーが自由に関数を設計できるよう」に設計されるべきです。したがって一番細かいレベルの目的を達成できるようなプリミティブな関数を提供すべきです。GLSC3D では点を打つ、線を描く、面を描く、文字を書くといったような基本的な関数群を揃えてありますので、それを組み合わせて使用することで、どんな関数でも設計することが可能です。これらの使用方法を熟読し自由な発想で描画を楽しんでください。

## 2 GLSC および GLSC3D Ver2.x からの変更点及び注意点

GLSC3D は GLSC の設計哲学を引き継ぎ構築されています。理想的には、関数の命名規則、引数などがシームレスに繋がり、ユーザには「どこが変わったかわからない」と思わせるように設計すべきです。しかしながら、それぞれの基盤ライブラリである OpenGL と X Window System は全く異なるものです。したがって、GLSC3D の開発は 0 から作り上げていく方式を取らざるを得ませんでした。そして開発中、どうしても変更せざるを得ないくつかの点が生じました。また、3 次元化されたこと及び新関数の導入によって、GLSC とは別の新たな注意点が発生しました。マニュアルの順番としては GLSC3D の関数を紹介した後に本章を置くべきですが、非常に重要な変更のため本章にてお知らせします。

#### 2.1 GLSC **からの変更点**

#### 2.1.1 Fortran 言語をサポートしていない

GLSC では Fortran をサポートしていましたが、GLSC3D ではサポートしていません。未来永劫に渡り、Fortran をサポートしないわけではありません。GLSC 同様に内部的にはすべてをポインタ渡しに Wrap するとで、Fortran から C を Call できますので、Fortran に強い方で Wrapper プログラムを書いてもいいよという方は筆者までお知らせください。

#### 2.1.2 最終の描画スタイルの変更

3次元オブジェクトを描画する際、OpenGL では描画命令をいくつかのまとまった単位になるまで保持し、一気に描画するというスタイルが取られます。また描画の最初と最後を明示的に指定しなければなりません (下記参照).\*26

```
      OpenGL の描画スタイル (3 次元空間内で線分を描画する場合)

      glBegin(GL_LINES);
      /*線を描き始めることを指定*/

      glVertex3f(0,0,0);
      /*線分の端点を指定*/

      glVertex3f(0,1,0);
      /*線分の端点を指定*/

      glEnd();
      /*線を描き終えたことを指定*/

      glFlush();
      /*線を描く命令を実行*/
```

一方, GLSC で描画命令はその都度実行されます。したがって、描画の最初と最後を明示的に 指定する必要はありません (下記参照)。

```
      GLSC の描画スタイル (2 次元空間内で線分を描画する場合)

      g_move(0,0);
      /*線分の端点を指定*/

      g_plot(0,1);
      /*線分の端点を指定*/
```

<sup>\*&</sup>lt;sup>26</sup> この方法は OpenGL 3.1 以降では廃止されており Vertex Buffer と Vertex Array を使用する必要があります.

GLSC のほうが記述が楽で良さそうに思えますが、描画命令がその都度実行されるので、OpenGL に比べ(若干ですが)描画が遅くなったり、画面がちらついたりする可能性があります。 $*^{27}$ .

GLSC3D では GLSC の哲学と OpenGL の良さを引き継いでいますので、次のように書くことができます。

```
GLSC3D の描画スタイル (3 次元空間内で線分を描画する)

g_move_3D(0,0,0); /*線分の端点を指定*/
g_plot_3D(0,1,0); /*線分の端点を指定*/
g_finish(); /*バッファの描画命令を実行*/
```

最後の  $g_finish$  ですが,GLSC ではなかった記述です. $g_finish$  はタイムループ内で描画 関数が終わった時**最後に一度だけ**呼ぶ必要があります.この関数を呼ぶことで,今までバッファ に溜まっていた描画命令が一気に実行されます.多くの場合,最終的な描画の後で画面を短い時間停止させます.GLSC ではそのような場合, $g_sleep$  関数を用いていました.GLSC3D では 最終的な描画の後で  $g_finish$  を用いる必要がありますので,次のようにプログラミングすることが多くなるでしょう.これが大きな変更点です.

```
      GLSC3D の描画スタイル
      /*描画 1*/

      g_xxxx;
      /*描画 2*/

      g_xxxx;
      /*描画 3*/

      .
      .

      .
      .

      .
      .

      g_finish();
      /*バッファの描画命令を実行*/

      g_sleep(0.05);
      /*0.05 秒間停止する*/
```

<sup>\*27</sup> OpenGL ではちらつきを抑えるためにダブルバッファリングという手法を用いることができます。GLSC3D はこの手法を用いています。

#### 2.2 GLSC3D Ver2.x からの変更点

#### 2.2.1 OpenGL の最新規格への追随

OpenGL は 1992 年に誕生しました。1990 年代,GPU は決められた描画アルゴリズムしか実行できませんでした。その後 GPU は劇的に進化し,現在はシェーダーと呼ばれる GPU 上で実行されるプログラムを用いてグラフィックスの表示を行うことが一般的となっております。

2008年にOpenGL 3.0が発表され、従来の固定機能に由来する大量のAPIが非推奨と宣言され、翌年のOpenGL 3.1で削除されました。現在も古いバージョンのOpenGL は残されているため固定機能を使い続けることはできますが、将来にわたって存在が保証されているわけではありません。GLSC は Ver 3.0で OpenGL の最新バージョンと互換性を保つこととしました。

#### 2.2.2 ウインドウライブラリを FreeGLUT から SDL への変更

以前の GLSC3D では FreeGLUT を用いてウインドウを表示していました.

Mac OS X 上では FreeGLUT はネイティブに動作せず, 代わりに XQuartz を用いて X Window System 上で動作させる必要がありました. しかし XQuartz は

- XQuartz 上で利用できる OpenGL がバージョン 2.1 に限定されるため, 非推奨な (OpenGL 3.1 以降廃止された) 描画方法しかできない
- ウインドウのサイズ変更・最大化ができない
- Retina Display に対応していないため、MacBook Pro などでの表示が美しくない
- 起動が遅い
- XQuartz 自体が将来にわたって存在するのかどうか怪しい

といった問題点があったため、使用するライブラリを FreeGLUT から SDL に変更しました.

#### 2.2.3 フォント埋め込みの廃止, フォント指定関数の変更, 日本語などの Unicode 文字への対応

以前の GLSC3D では 4 種類の日本語フォントをライブラリに埋め込んでいましたが、ファイルサイズが肥大化するためこれを廃止しました。Ver 3.0 以降ではインストーラーが、GLSC3D に同梱されたフォント Noto Sans CJK JP Regular  $^{*28}$  を

Mac OS X ~/Library/Fonts/

Linux /usr/share/fonts/opentype/noto/

Windows C:/Windows/Fonts/

に配置し、GLSC3D はここからデフォルトフォントを読み込みます。違うフォントを使いたい場合、g\_text\_font\_core にフォントファイル名を指定してください。

<sup>\*28</sup> Google Noto Fonts (https://www.google.com/get/noto/) にて配布されています.

埋め込みフォントを指定する関数 g\_text\_font を廃止しました。また、テキストのフォント指定 g\_text\_font\_core とサイズ指定 g\_text\_size を分離しました。また、g\_def\_text 関数の font 引数を削除しました。

日本語や数学記号などの Unicode 文字に対応しました。これを用いる場合文字列のエンコードは必ず UTF-8 にしてください。gcc では文字列リテラルのエンコードはデフォルトで UTF-8 になります。お使いのコンパイラーのデフォルトが UTF-8 でない場合,C++11 の u8 プレフィックスを使用してみてください。(C++11 としてコンパイルする必要があります)

g\_text\_virtual\_3D(0, 0, 0, u8"**あいうえお**");

#### 2.2.4 ウィンドウのサイズ変更・最大化と Apple Retina Display の対応

Ver 3.0 以降ではウィンドウのサイズ変更・最大化と Apple Retina Display に対応しています. このため、GLSC3D は内部的にスケールファクターを保持しており、g\_init(\_core) に渡されたウインドウサイズに対する現在のサイズの比率 (の水平方向と垂直方向の値の小さいほう) を使用します。スケールの対象になるのは次の関数です.

- g\_sel\_scale
- g\_marker\_size, g\_line\_width, g\_text\_size
- g\_text\_standard
- g\_input\_state (マウス座標の逆変換)

Ver 3.0 以降では g\_sel\_scale を (最初に 1 回だけ呼ぶのではなく) ループ内で使用することをお勧めします。これによりウインドウサイズの変更に適切に対応できるようになります。

g\_capture を用いる場合、ウインドウサイズの変更は行わないでください。

Apple Retina Display の対応はデフォルトでは無効になっています. 有効化する場合, g\_enable\_highdpi() を g\_init(\_core) の前に呼び出してください. この場合, Retina Display で実行したときにはスケールファクターの初期値は 2 になります. それ以外の場合, スケールファクターの初期値は 1 です.

#### 2.2.5 ワイヤーフレームとサーフェイス塗りつぶしの引数の変更

以前の GLSC3D は各関数に WireFill パラメータが存在しており、 $G_WIRE=0$ (ワイヤーフレーム) または  $G_FILL=1$ (サーフェイスを塗りつぶす) を指定できました.

GLSC 3.0 では旧 GLSC に近づけるため、Wire パラメータと Fill パラメータに分離し、それ ぞれに  $G_YES=1$  または  $G_NO=0$  を指定するようにしました。

注意: この変更は主に旧 GLSC ユーザーのためのものです。Wire パラメータと Fill パラメータの両方に G\_YES を指定した場合、線分と三角形が混合しパフォーマンスが低下します。できるだけワイヤーフレームの描画とサーフェイスの描画を分離してください。

#### 2.2.6 2D **の描画順の変更**

以前の GLSC3D では 2D で先に描画したものが後に描画したものより優先して表示されていました. Ver 3.0 以降では後に描画したものが優先して表示されるように変更しました. 3D モード の場合も奥行きが完全に一致したときには、同様の挙動になるように変更されています.

#### 2.2.7 g\_box\_2D, g\_box\_3D(\_core) **関数の仕様変更**

以前の GLSC3D では長方形や直方体を描画する g\_box\_2D, g\_box\_3D(\_core) 関数には、中心と大きさを指定していました.

Ver 3.0 では旧 GLSC と同様に両端の x,y (,z) 座標を指定するようにしました. 以前のように中心と大きさを指定する場合, g\_box\_center\_2D, g\_box\_center\_3D(\_core) を使用してください.

#### 2.2.8 g\_area\_color 関数の仕様変更

以前の GLSC3D では g\_area\_color\_2D 関数, g\_area\_color\_3D 関数がありましたが, 2D でも 3D でも面の色の指定法は同じ指定方法の方が簡便であると考え, この関数を廃止しました. 新しい関数は g\_area\_color となりますので, ご注意ください.

#### 2.2.9 マーカーの種類の追加

g\_marker\_type として正方形, 円のほかに球を指定できるようにしました. 引数には定数 G\_MARKER\_SQUARE=0, G\_MARKER\_CIRCLE=1, G\_MARKER\_SPHERE=2 を指定できます.

球マーカーは3次元で小さな球を大量に描画する目的に最適化されており高速に動作します。 そのような目的ではg\_sphere\_3D(\_core)を使用しないでください。

どの種類のマーカーでも、サイズは g\_marker\_size によりピクセル単位の直径を指定できるほか、g\_marker\_radius により自由座標系での半径を指定することができます。

#### 2.2.10 スムーズシェーディング用の関数、構造体を引数とする関数の追加

3D の三角形を描画するときに、陰影をスムーズにするために頂点法線を指定できる関数 g\_triangle\_3D\_smooth(\_core) を追加しました.

GLSC3D Ver 3.0 では色 (r,g,b,a) を保持する G\_COLOR 構造体と座標 (x,y,z) を保持する G\_VECTOR 構造体を公開しています. 各成分は float 型です.

G\_COLOR 構造体は以下の関数で使用することができます.

g\_area\_color\_s

g\_marker\_color\_s, g\_line\_color\_s, g\_text\_color\_s

G\_VECTOR 構造体は以下の関数で使用することができます.

g\_marker\_s, g\_move\_s, g\_plot\_s
g\_triangle\_2D\_s, g\_triangle\_3D\_s, g\_triangle\_3D\_core\_s
g\_triangle\_3D\_smooth\_s, g\_triangle\_3D\_smooth\_core\_s

#### 2.2.11 その他

Ver 3.0 以降ではライトの最大数を 3 つに変更しました。これは 4 つ以上のライトは不要と判断してのことですが、要望がある方は本マニュアルの"おわりに"をご覧ください。

アンチエイリアシングを使用して描画することを指定できるようにしました。 アンチエイリアシングは線や面の境界で発生するジャギーを低減して滑らかに表示します。 詳細は g\_set\_antialiasing を参照してください。

プログラムを Esc キーで終了できるようにしました. そのため、プログラムがキーボード入力として Esc を使用することはできません.

g\_init\_core に指定するウインドウの位置として、画面の中央に表示することを意味する G\_WINDOW\_CENTERED を指定できるようにしました.

多次元配列を受け取る関数

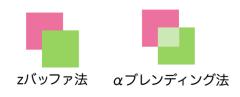
g\_bird\_view\_3D, g\_contln\_2D, g\_data\_plot\_3D, g\_isosurface\_3D はプリプロセッサマクロにより対応する 1 次元配列版

g\_bird\_view\_f\_3D, g\_contln\_f\_2D, g\_data\_plot\_f\_3D, g\_isosurface\_f\_3D に変換されるようにしました。今後は C++ でも多次元配列版を使うことができます。

#### 2.3 GLSC3D **の注意点**

#### 2.3.1 **物体の透明化における注意点 (Ver1.x をお使いの方へ)**

2 枚の板が重なっている状況を考えます。3 次元では 奥行き情報があるので、それを元にどちらが手前にある かを判定し (z バッファ法と呼ばれます) 描画を行いま す。GLSC では物体の透明化処理はできませんでしたが、

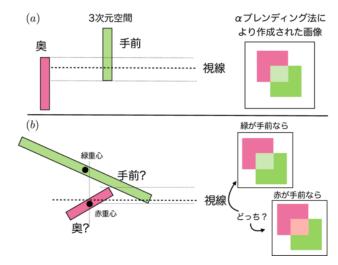


GLSC3D では  $\alpha$  ブレンディング法を用いて透明化処理を行うことができます。 $\alpha$  ブレンディング法はオブジェクトとオブジェクトが重なるとき,視点に対して手前にあるオブジェクトの色を,奥にあるオブジェクトの色と混ぜ合わせ描画することによって,透明化処理を行います。この事からわかるように, $\alpha$  ブレンディング法は z バッファ法と同時に使うことは原理的に不可能です。そこで, $\alpha$  ブレンディング法を使用する際は,z バッファ法は OFF にし,視点に対して奥の方から先に 3D オブジェクトの描画を行う必要があります。GLSC3D では  $\alpha$  ブレンディング法を使用する際に自動的に z バッファ法は OFF になり\*29ますが,視点に対して奥の方から先に 3D オブジェクトの描画行うことはプログラマの責任となります。

このように書くと、それを自動化できないのか?と思う方もいると思います。回答として「原理的には可能なはず、しかしながら、非常に困難」であるといえます。 $\alpha$  ブレンディング法の肝は「視点に対して奥の方から先に 3D オブジェクトの描画行う」ことです。つまり視点に対してどのオブジェクトが奥にあるか?ということを自動的に判定せねばなりません。 $g_finish$  が呼ばれた瞬間にこの自動判定を行うことができれば、原理的には可能です。しかしながら、物体が何かの物体の手前あるもしくは奥にあるとはどういうこととして定義されるでしょうか?

図 (a) では視線に対して、緑のオブジェクトが手前、赤が奥となっています。緑のオブジェクトを構成するどの頂点も、赤のオブジェクトを構成する頂点よりも手前にあることが計算できるので、自動的に奥行き判定をすることができ、 $\alpha$  ブレンディング法を実行できます。

一方(b)も同じ状況ですが、緑のオブジェクトを構成する頂点は、赤のオブジェクトを構成する頂点よりも手前、もしくは奥にある



ため一概には判定できません。情報を減らして、それぞれの重心位置で比較することも考えられますが、この場合は「緑が奥にある」と判定されてしまい、意図した結果となりません。

 $\alpha$  ブレンディング法を実行するために 3 次元オブジェクトの手前と奥を特徴づけるよい方法があれば良いのですが、筆者の調べた限りでは、そのような方法は無いようです。 バージョン 1.x の

<sup>\*29</sup> GLSC3D では  $\alpha$  ブレンディング法の使用が終わると z バッファ法は自動的に ON になります。 つまり  $\alpha$  ブレンディング法が特別扱いにされています。

GLSC3D では、 $\alpha$  ブレンディング法における本問題はプログラマの責任で対処するしかなさそうです.

#### 2.3.2 **物体の透明化における注意点** (Ver1.x **以降 をお使いの方へ**)

しかしながら、これでは不便であるということで Ver2.0 からはある手続きを行うことで透明 化処理を自動的に行わせることが可能となりました。(この処理を自動的に実行させるためには、 GLSC3D の初期化関数 g\_init\_core にて g\_enable\_transparent\_out = 1 としてください。)ですので、以降の説明は必ずしも読む必要はありませんが、高度なプログラミングを行いたい方は知識として知っておいてください。

関数を基本的なアイデアは簡単で以下のような手続きを踏んでいます.

- ステップ1:任意の3次元オブジェクトを3角形分割する
- ステップ 2:3 角形分割された描画命令を溜め込む
- ステップ3:3角形の重心を求め、視点に対して遠い順番に並べ替え溜め込む
- ステップ 4:g\_finish が呼ばれた段階で、視点に対して遠い 3 角形から描画を行う

#### ステップ 1:任意の3次元オブジェクトを3角形分割する

任意の 3 次元オブジェクトは 3 角形分割によって描画することが可能です。分割数は多いほど滑らかな表示になります。GLSC3D では面を描く場合,内部の関数では最終的にはすべて  $g_{triangle_3D_core}$  が Call されています。逆にユーザーが自身で関数を設計する場合も  $g_{triangle_3D_core}$  を用いてプログラミングを行ってください。用いない場合は透明化処理が適切に自動化されません。

#### ステップ 2:3 角形分割された描画命令を溜め込む

g\_enable\_transparent = 1 の場合,GLSC3D は描画命令を溜め込むバッファ (以降 TRIANGLE\_BUFFER と呼びます) を自動的に確保します。デフォルトの TRIANGLE\_BUFFER のサイズは  $2^{20}$  個の三角形を登録できるようなサイズ(大体 500MB に相当)です。ほとんどこのサイズで問題は起きないはずですが,使用中 too many triangles for triangle buffer などと表示される場合は関数 g\_init\_core にてバッファサイズ (TRIANGLE\_BUFFER\_SIZE) をさらに大きくしてください。

#### ステップ3:3角形の重心を求め、視点に対して遠い順番に並べ替え溜め込む

3 角形の重心を求めることは容易ですが、視点に対して遠い順番に並べ替える方法をどのように実装するかは難しい問題でした。GLSC3Dでは3角形の描画命令をTEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER\_SIZEの数だけクイックソートアルゴリズムを用いてソートし、テンポラリなバッファ(以降 TEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER と呼びます)にスタックします。その後、マージソートアルゴリズムを用いて TRIANGLE\_BUFFER にマージ&ソートし情報をアップデートします。このように TRIANGLE\_BUFFER は現時点の TRIANGLE\_BUFFER とTEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER から作られます。どのようなアルゴリズムを用いてソートを行うことが最も高速となるかは自明ではないため、様々なアルゴリズムを組み合わせて用いました。その結果、少なくとも筆者の環境ではこの方式が最も高速でした。デフォルトの設定では

TEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER のサイズ TEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER\_SIZE は  $2^{10}$  個の三角形を登録できるようなサイズです。このサイズが極端に大きかったり、小さかったりすると描画が非常に遅くなることが確認されています。ただし、ここでいうサイズの大きさの問題は、描画するべき対象に依った問題となりますので、最適値はわかりません $^{*30}$ . 多くの場合、デフォルト値で問題は生じないと思われますが、描画遅いなどの問題が生じた場合は関数 g\_init\_core にて TEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER\_SIZE を変更し最適値を見つけてください。

#### ステップ 4:g\_finish が呼ばれた段階で、視点に対して遠い3角形から描画を行う

ステップ 3 までの処理で、 $TRIANGLE\_BUFFER$  には視点から遠い順番で三角形の描画命令が登録されています。これらの三角形は  $g\_finish$  関数が呼ばれた時点で描画されます。

GLSC3DではGLSCと同様に標準座標系の中に複数の自由座標系を構築することができますが、このステップ1~4 は複数の自由座標系において自動的に適用されます。したがって、ユーザーはg\_triangle\_3D\_core を用いて描画さえすれば、特に何も意識しなくても、正しく透明化処理を行うことができます。ただし、透明化処理を行う際には別の注意も必要です。それは「3次元オブジェクトの三角形分割は十分に細かくなければならない」という点です。ステップ3において、3次元オブジェクトを大きな三角形で分割すると、分割が荒いことが影響し視点に対する奥行き判定の際に、ミスが生じます。このことを防ぐためには、3次元オブジェクトの三角形分割は十分に細かくする必要があります。例えば、g\_sphereという関数は与えられ点を中心に、与えられた半径の球を描画する関数です。この関数にはその上位関数としてg\_sphere\_coreが存在しますが、その引数として int DivideLevel があります。この DivideLevel を 0 として指定する場合は1つの3角形を描きますが、1を指定すると4個の3角形、2を指定すると16個の3角形という具合に親3角形をさらに小さな子三角形へと分解し描画します。このような機能はほぼすべての描画関数に対して存在しますので、有効に活用してください。

透明化処理を行う際は、この点に注意いただくとともに、もし、さらに良いアイデアをお持ちの方がいましたら教えてください。

<sup>\*30</sup> 将来的には描画の時間を内部的に取得し,最適値を漸近的に求めるようにするかもしれません

# 3 動作環境とその構築

GLSC3D Ver. 3.0.0 以降では、依存ライブラリとインストール方法が変更されています。必ずお読みください。

#### 3.1 動作環境

GLSC3D Ver. 3.0.0 以降では、OpenGL、SDL、libPNG、FreeType、Math ライブラリに依存します。OpenGL、SDL は GLSC3D の根幹部分です。PNG ライブラリは画面をキャプチャするために必要です\*<sup>31</sup>. C 言語の Math ライブラリは描画関数内で数学関数を用いているために必要です。

頂点データを保持用に、9MB のメモリー領域を使用します。これは  $2^{16}$  個の三角形を一度に GPU に転送できるサイズです。

#### 3.2 動作環境の構築

GLSC3D Ver. 3.0.0 以降では、GLSC3D をインストールためのシェルスクリプトを OS 毎に用意しています。http://www-mmc.es.hokudai.ac.jp/~masakazu/ の公開ソフトウェアから対応するスクリプトをダウンロードし、実行することによってインストールが行われます。

#### 3.2.1 Mac OS X **の場合**

#### (1) Xcode のインストール:

Mac OS X は Xcode を導入しなければ、様々な開発環境がインストールされません。まず Xcode をインストールしてください。App Store で Xcode を検索すればトップに表示されます。

#### (2) Mac OS X 用シェルスクリプト:

Script\_on\_mac.zip を解凍すると以下の実行ファイルが入手できます:

- $1_{\text{Install\_macports\_mac}}$
- 2\_Install\_dependency\_library\_mac
- 3\_Test\_GLSC3D\_on\_mac
- 4\_Install\_GLSC3D\_on\_your\_mac

#### (3) 1\_Install\_macports\_mac の実行:

1つ目のスクリプトでは、MacPorts がインストールされているかを確認します。以下のように実行すると、右図のようにブラウザで https://www.macports.org/のページが開くので、インストールしていない場合はダウンロー



 $<sup>^{*31}</sup>$  http://www.libpng.org/pub/png/libpng.html

ドおよびインストールを行って下さい.

- スクリプトの実行 ――

\$: ./1\_Install\_macports\_mac

無事にインストールされたら、次のステップに進んで下さい.

#### (4) 2\_Install\_dependency\_library\_mac の実行:

2つ目のスクリプトでは、GLSC3D が依存しているライブラリで Mac OS X に必要なもの (cmake, libPNG, libsdl2) を導入します.

- スクリプトの実行 ――

\$: ./2\_Install\_dependency\_library\_mac

無事にインストールされたら、次のステップに進んで下さい.

#### (5) 3\_Test\_GLSC3D\_on\_mac の実行:

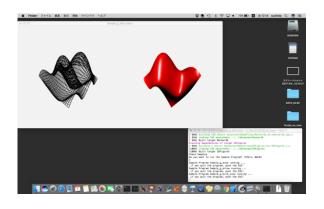
3つ目のスクリプトでは、はじめに\$HOME にGLSC3D\_Working\_Directory というディレクトリが作成され、GLSC3D\_Working\_Directory にhttps://github.com/GLSC3DProject/GLSC3Dから最新版のGLSC3Dがダウンロードされます。GLSC3D\_Working\_Directory内のファイルは下図のようになります。また、フォントファイルがシステムにない場合は\$HOME/Library/Fontsにインストールされます。次に、全てのサンプルプログラムとアドバンスドプログラムが実行できるかを確認します。サンプルプログラムとアドバンスドプログラムとアドバンスドプログラムとアドバンスドプログラムをアドバンスドプログラムとアドバンスドプログラムとアドバンスドプログラ

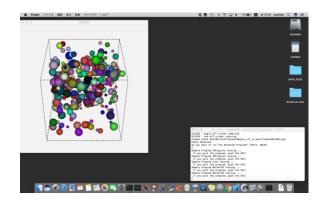


ムは実行時間がすこしかかるので、Noを選択してスキップすることもできます。各プログラムは esc キーを押すと終了します。

- スクリプトの実行 ―

\$: ./3\_Test\_GLSC3D\_on\_mac





無事にインストールされたら,次のステップに進んで下さい.

#### (6) 4\_Install\_GLSC3D\_on\_your\_mac の実行:

4つ目のスクリプトでは、はじめに\$HOME 直下に 3 つのフォルダ bin, include, lib を作成し、ccg を bin に、glsc3d\_3.h、glsc3d\_3\_math.h を include に、libglsc3d\_3.a を lib に、Hello\_GLSC3D.c を GLSC3D\_Working\_Directory の直下に保存します。次に、bin、include にパスが通っているかの確認をします。

- スクリプトの実行 —

\$: ./4\_Install\_GLSC3D\_on\_your\_mac

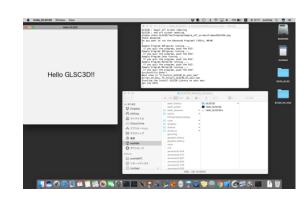
パスが通っていない場合はメッセージに従って, 下記のように使用しているシェル (.bashrc or .profile など) を編集して下さい.

- パスの通し方 -

export PATH=\$PATH:\$HOME/bin

export PATH=\$PATH:\$HOME/include

無事にパスが通っていれば、bin 内の ccg コマンドによって自動的にサンプルプログラム



Hello\_GLSC3D.c がコンパイルされ,実行されます。(右図のように実行画面が表示されれば成功です。) 実行がうまく行った場合は,システムに正しく GLSC3D がインストールされたことになります。

#### 3.2.2 Ubuntu **の場合**

#### (1) Ubuntu 用シェルスクリプト:

Script\_on\_ubuntu.zip を解凍すると以下の実行ファイルが入手できます:

- 1\_Install\_dependency\_library\_ubuntu
- 2\_Test\_GLSC3D\_on\_ubuntu
- 3\_Install\_GLSC3D\_on\_your\_ubuntu

#### (2) 1\_Install\_dependency\_library\_ubuntu の実行:

1つ目のスクリプトでは、GLSC3D が依存しているライブラリで Ubuntu に必要なもの (git, cmake, libPNG, libsdl2, freetype) を導入します.

- スクリプトの実行 ―

\$: ./2\_Install\_dependency\_library\_ubuntu

無事にインストールされたら、次のステップに進んで下さい.

#### (3) 2\_Test\_GLSC3D\_on\_ubuntu の実行:

2つ目のスクリプトでは、はじめに\$HOMEにGLSC3D\_Working\_Directoryというディレクトリが作成され、GLSC3D\_Working\_Directoryにhttps://github.com/GLSC3DProject/GLSC3D

から最新版の GLSC3D がダウンロードされます。また、フォントファイルがシステムにない場合は/usr/share/fonts/opentype/noto にインストールされます。次に、全てのサンプルプログラムとアドバンスドプログラムが実行できるかを確認します。サンプルプログラムとアドバンスドプログラムは実行時間がすこしかかるので、No を選択してスキップすることもできます。実行結果は Mac OS X と同様です。

- スクリプトの実行 ―

\$: ./2\_Test\_GLSC3D\_on\_ubuntu

無事にインストールされたら、次のステップに進んで下さい.

#### (4) 3\_Install\_GLSC3D\_on\_your\_ubuntu の実行:

4つ目のスクリプトでは、はじめに\$HOME 直下に 3 つのフォルダ bin, include, lib を作成し、ccg を bin に、glsc3d\_3.h、glsc3d\_3\_math.h を include に、libglsc3d\_3.a を lib に、Hello\_GLSC3D.c を GLSC3D\_Working\_Directory の直下に保存します。次に、bin、include にパスが通っているかの確認をします。

- スクリプトの実行 ―

\$: ./3\_Install\_GLSC3D\_on\_your\_ubuntu

パスが通っていない場合はメッセージに従って,下記のようにシェルを編集して下さい. - パスの通し方: 使用しているシェル (.bashrc or .profile など) において書きを追加します.-

export PATH=\$PATH:\$HOME/bin

export PATH=\$PATH:\$HOME/include

無事にパスが通っていれば、bin 内の ccg コマンドによって自動的にサンプルプログラム  $Hello\_GLSC3D.c$  がコンパイルされ、実行されます。実行結果は Mac OS X と同様です。実行が うまく行った場合は、システムに正しく GLSC3D がインストールされたことになります。

#### 3.2.3 CentOS **の場合**

CentOS でのインストールでは、glxinfo にて OpenGL のバージョンが 4.1 以降であることと libpng および font に対するパスの指定が正しくできていれば動作する可能性があります。ライブ ラリのバージョンが Ubuntu に比べて古いので動作の保証ができません。GLSC3D Ver. 2.1.1 を 使用されることをお勧めします。

#### 3.2.4 Windows **の場合**

32 ビット版 Windows には対応しておりません。64 ビット版 Windows をご使用ください。

#### (1) Visual Studio のインストール:

GLSC3D を使用するには Visual Studio 2017 または 2015 が必要です。Community Edition は無料で使用することができます。インストールされていない方は

https://www.visualstudio.com

からダウンロードしてください.

インストールの際は C++ によるデスクトップ開発にチェックを入れてください.

#### (2) GLSC3D のダウンロード:

Github から GLSC3D のバイナリをダウンロードしてください.

https://github.com/GLSC3DProject/GLSC3D/releases

から GLSC3D\_3.zip をダウンロードして展開します.

生成された GLSC3D\_3 フォルダを好きな場所に移動します (インストール先になります).

#### (3) パスの設定:

GLSC3D\_3 フォルダ内にある Bin フォルダの場所を環境変数 Path に追加します.

- 1. Bin フォルダのパスをコピーします.
- 2. エクスプローラーの左側にあるツリーで "PC" を右クリックして "プロパティ (R)" を選択します。"システム" ウインドウが表示されます。
- 3. 左側にある'システムの詳細設定'を選択します.
- 4. "環境変数 (N)" をクリックします.
- 5. ユーザー環境変数の Path をダブルクリックします.
- 6. "新規 (N)" をクリックします.
- 7. 入力欄に Bin フォルダのパスを貼り付けします.

#### (4) フォントのインストール:

フォント "Noto Sans CJK JP" をインストールします.

同梱された NotoSansCJKjp-Regular.otf を右クリックして "インストール (I)" を選択します。インストールが終わったらこのファイルは削除してかまいません。

以上で GLSC3D のインストールは終わりです。次のページでコンパイル方法を説明します。

#### (5) プログラムのコンパイル:

Bin フォルダにある ccg.bat を使用してコンパイルすることができます. 例えば, Hello\_GLSC3D.c をコンパイルするには、それを含むフォルダをコマンドプロンプトで開き

ccg Hello\_GLSC3D.c

とすると Hello\_GLSC3D.c をコンパイルすることができます.

Visual Studio のプロジェクトから使用するときには、プロジェクトのプロパティからインクルードディレクトリとリンクライブラリを指定してください. Lib フォルダにある全てのファイルのほか、openg132.1ib, user32.1ib をリンクする必要があります.

#### (6) サンプルプログラムの実行:

Samples にある RunAllSamples.bat を実行すれば、サンプルプログラムやアドバンスドプログラムをコンパイルして実行することができます (セキュリティーの警告が表示されることがあります). 実行するとサンプルプログラムとアドバンスドプログラムで各 1 回ずつ確認メッセージが表示されるので、Y/N(小文字でも可)で答えてください.

また、Clean.bat を実行すれば、RunAllSamples.bat の生成物である\*.obj、\*.exe ファイルと Frames.\*フォルダーを一括で削除することができます.

#### (7) Windows 特有の注意点:

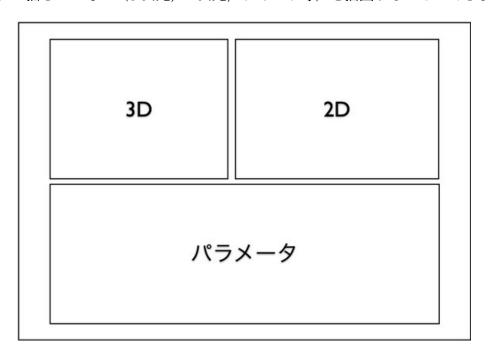
Visual Studio のコンパイラにおいて, 文字列リテラルのエンコードはデフォルトでは Shift-JIS になります。GLSC3D は UTF-8 以外には対応していないため, ASCII 以外の文字 (日本語など)を表示するときは必ずプログラムの先頭に

#pragma execution\_character\_set("UTF-8")

と記述してください. (Sample\_g\_text.c に例があります.)

# 4 GLSC3D の関数

GLSC3D は GLSC と同様に一枚のキャンバスに対して、いくつかの絵を描画するようなソフトであると考えてください。適切な関数を用い、キャンバスをいくつかのエリアに区切り、それぞれのエリアに描きたいもの(3 次元、2 次元、テキスト等)を描画することができます。



GLSC3D を利用する際、多くの場合基本的な枠組みは以下のような形態となるでしょう。ここでは我々が用意した関数それぞれについての説明とその実行例も記載しておりますので、個々の関数の使用方法はそちらをご覧ください。なお、具体的な使用例はサンプルプログラムがありますので、そちらをご覧ください。

```
#include <...>
#include <glsc3d_3.h>
int main()
{
  g_init(...); //用紙の設定
  g_def_scale_3D(0,...); //0番の自由座標系の定義
  g_def_scale_3D(1,...); //1 番の自由座標系の定義
/************/
           数値計算
g_cls(); //用紙を背景色で塗りつぶす
  //自由座標系を選択→属性を指定→描画関数で描画.
  g_sel_scale(0); //0 番の自由座標系を選択(以下, 0 番の自由座標系に描かれる。)
  g_area_color(...); //塗りつぶしの色を指定
  g_box_3D(...); //3 次元空間に box を描画
  //自由座標系を選択→属性を指定→描画関数で描画.
  g_sel_scale(1); //1 番の自由座標系を選択(以下, 1 番の自由座標系に描かれる。)
  g_area_color(...); //塗りつぶしの色を指定
  g_sphere_3D(...); //3 次元空間に sphere を描画
  g_finish(); //描画する
  return 0;
}
```

ここで GLSC3D を使いこなすために必要な幾つかの概念について解説します.

#### 描画ウィンドウと標準座標系

基本的な枠組み

すでに述べたように、GLSC3D においては、ディスプレイ上に描画ウィンドウを開いて、その上にいくつかの描画エリアを定め、それぞれの描画エリアにグラフィクスを表示します。標準座標系は描画ウィンドウ上に定義される座標系で、描画エリアを定義するのに使われます\*32.

標準座標系は、描画ウィンドウ左上のコーナーを (0.0,0.0) とするピクセル単位\*33の座標系です。標準座標系では GLSC2D と同様、標準 x 座標はウィンドウ左から右への方向、標準 y 座標はウィンドウ上から下への方向をそれぞれ正の方向としています。

#### 描画オブジェクト空間と固定座標系

3次元グラフィクスにおいて、描画されるオブジェクトが置かれる 3次元ユークリッド空間を描画オブジェクト空間と呼びます。そして、この空間における通常の直交座標系を固定座標系と呼びます\* $^{34}$ . ここでいう「通常」の意味は、この座標系における 3 つの基本ベクトル (1,0,0), (0,1,0), (0,0,1) の長さが全て 1 であることと、これらが右手系をなすことを意味しています。

この固定座標系を用いて描画オブジェクトを記述することももちろんできますが、GLSC3Dでは以下に述べる自由座標系を用いて描画オブジェクトを記述します。

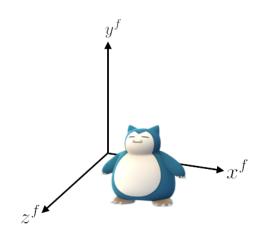


図 1 描画オブジェクト空間と固定座標系  $(x^f,y^f,z^f)$ . この座標系は等縮尺で右手系です。なお,この図では  $y^f$  軸が上を向いているように見えますが,描画オブジェクト空間自体には上下という概念はありません。オブジェクトをどう見るかを決める段階で上下が生じます。 (P.52 を参照ください。)

#### 自由座標系

例えば z = f(x,y) のグラフの鳥瞰図を描く場合を考えてみますと、少なくとも変数 z の値は ユークリッド空間における z 座標には対応していない場合がほとんどです(f(x,y) が位置 (x,y)

<sup>\*32 2</sup>次元グラフィクスにおいては、後述の固定座標の役割を兼務します。

<sup>\*33</sup> MacBookPro などのような Retina Display を搭載する機種は、必ずしも表示される映像は指定したピクセルとはなりません。従って、標準座標の数値は、厳密にはピクセルを指しません。ただし、多くの環境では標準座標の数値=ピクセルと考えてもらって良いです。

<sup>\*34</sup> GLSC2D では描画オブジェクト空間と描画ウィンドウを同一視することができるため、わざわざ固定座標系という概念を持ち出さなくても、標準座標系だけで話が完結していましたが、GLSC3D 3.0.0 以降では、本概念が必須となりました。

における温度や気圧を表している場合など)。 もちろん変数 x,y においても同様です (f(x,y)) が 身長 x 体重 y の頻度分布である場合など)。 このような場合,固定座標を用いてそのままの変数 値で描画すると,とんでもなく背が高いグラフや平べったいグラフになってしまいかねません。 そこで,描画オブジェクト空間に対し,固定座標とは別の自由なスケールを持った自由座標系を 導入して,その座標系を用いて描画オブジェクトを生成する必要があります.

この自由座標系は次のようにして定義します。まず、描画オブジェクト空間に固定座標  $(x^f, y^f, z^f)$  を用いて直方体  $[x_0^f, x_1^f] \times [y_0^f, y_1^f] \times [z_0^f, z_1^f]$  を定めます。これは基本的に描画オブジェクトを収納したい領域です。そして、その直方体が自由座標 (x, y, z) では  $[x_0, x_1] \times [y_0, y_1] \times [z_0, z_1]$  となるように両座標系の対応を定めるのです。式で書けばその対応は以下のようになります。

$$\frac{x - x_0}{x_1 - x_0} = \frac{x^f - x_0^f}{x_1^f - x_0^f}, \quad \frac{y - y_0}{y_1 - y_0} = \frac{y^f - y_0^f}{y_1^f - y_0^f}, \quad \frac{z - z_0}{z_1 - z_0} = \frac{z^f - z_0^f}{z_1^f - z_0^f}$$

この自由座標系の定義は g\_def\_scale\_3D という重要な関数を用いて行います (P.48 を参照ください.).

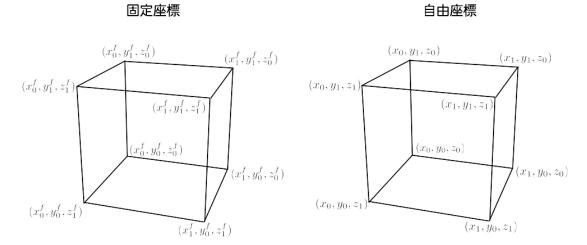


図 2 左図:固定座標で定めた直方体 右図:同じ直方体の自由座標での表現

なお、この座標系は旧 GLSC では仮想座標系と呼ばれていたもので、おなじみの概念ではありますが、GLSC3D における 2次元グラフィクスにおいても、対応する座標系を自由座標系と呼ぶことにします。 2次元グラフィクスにおける自由座標系の定義に関しては g\_def\_scale\_2D を参照してください(P.47を参照ください。)

#### 自由座標系による描画

GLSC3D では全ての描画は自由座標系を用いて行われます $^{*35}$ . 固定座標系を使用することはありません. とは言っても、3次元グラフィクスにおいては、固定座標系を用いて(すなわち xyz 方向等縮尺で)描画オブジェクトを生成したいこともあるでしょう. そのような場合

 $<sup>^{*35}</sup>$  例外は g\_text\_standard です.

は,固定座標系に一致する自由座標系を定義した上で,その自由座標系を使用してください。  $(x_0=x_0^f,\ x_1=x_1^f,\ y_0=y_0^f,\ y_1=y_1^f,\ z_0=z_0^f,\ z_1=z_1^f)^{*36}$  .

### 描画における属性

例えば線を描く場合,色や線の太さなどを指定したいこともあります。色や線の太さなどを属性と呼び,属性を適切に設定することで,描きたい描画対象の属性を変更し描くことが出来ます。 この属性は属性コントロール関数を用いて変化させることができます。

#### 関数名について

- ・ "\_2D"や "\_3D"がついていないもの・・・2 次元描画と 3 次元描画で共に使用可能.
- ・"\_2D"がついてるもの・・・2次元描画のみで使用可能、もしくは、3次元描画で使用すると描画が不自然となるもの。
- ・"\_3D"がついてるもの・・・3 次元描画のみで使用可能,もしくは,2 次元描画で使用すると描画が不自然となるもの。

 $<sup>^{*36}</sup>$  左手系にしたければ,例えば  $x_1=x_0^f,\ x_0=x_1^f$  のように一つの自由座標をフリップしてください.

# 4.1 制御関数

### 4.1.1 g\_init

- g\_init 関数 **-**

void g\_init(

const char \*WindowName,
int width, int height);

WindowName; ウィンドウの名前, 又は G\_OFF\_SCREEN を設定します. G\_OFF\_SCREEN では 画面は表示されません

width; ウィンドウの幅 (ディスプレイ上の座標 (ピクセル単位))

height; ウィンドウの高さ (ディスプレイ上の座標 (ピクセル単位))

### - g\_init 関数の説明

描画するウィンドウを設定するための関数です。ウィンドウはディスプレイの中央に表示されます。G\_OFF\_SCREENを設定した場合、画面は表示されませんが、キャプチャーは問題なく行えます。※当然ながら、マウス・キーボードを用いたインタラクティブな操作は出来なくなります。

### 4.1.2 g\_init\_core

- g\_init\_core 関数 -

void g\_init\_core(

const char \*WindowName,
int width, int height,
int pos\_x, int pos\_y,
float r, float g, float b,
int enable\_transparent,
int temporary\_triangle\_buffer\_size,
int triangle\_buffer\_size);

WindowName; ウィンドウの名前, 又は G\_OFF\_SCREEN を設定します. G\_OFF\_SCREEN では 画面は表示されません

width; ウィンドウの幅 (ピクセル単位)

height; ウィンドウの高さ (ピクセル単位)

pos\_x; ウィンドウの左上x座標 (ピクセル単位) または G\_WINDOW\_CENTERED

pos\_y; ウィンドウの左上 y 座標 (ピクセル単位) または G\_WINDOW\_CENTERED

r, g, b; 背景色の初期値を設定(不透明度は1に固定)

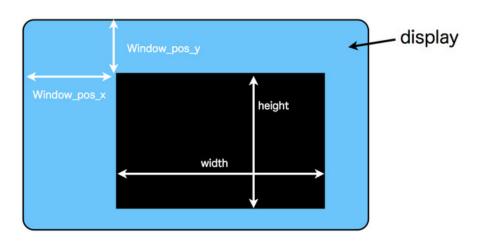
enable\_transparent;透明化処理にて並び替え機能を使用するか(1)しないか(0).

temporary\_triangle\_buffer\_size;

透明化処理用の TEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER\_SIZE を指定する。デフォルトは  $2^{10}$  triangle\_buffer\_size ; 透明化処理用の TRIANGLE\_BUFFER\_SIZE を指定する。デフォルトは  $2^{20}$ 

### - g\_init\_core 関数の説明 🗕

描画するウィンドウを設定するための関数です。g\_init に比べて細かい制御が可能です。 Ver 3.0 以降: pos\_x, pos\_y に G\_WINDOW\_CENTERED を指定すると, ウインドウをディスプレイの中央に表示します。



### 4.1.3 g\_init\_light

### - g\_init\_light 関数の説明 -

ライトの方向を設定するための関数です。ライトは常に平行光源です。ライト 0 から 2 の 3 個までの光源を設定できます。この関数を呼ばずに描画した場合,デフォルト値として  $g_{init\_light}(0, 0, 0, 1)$  の光源が設定されます。

# 4.1.4 g\_init\_light\_core

g\_init\_light とほぼ同じですが、光源の強さを指定できます。

### 4.1.5 g\_disable\_light

```
g_disable_light 関数

void g_disable_light(
    int lightnum);

lightnum; ライトの番号 (0~2)
```

- g\_disable\_light 関数の説明 ·

- g\_init\_light\_core 関数の説明 -

g\_init\_light, g\_init\_light\_core によって有効化されたライトを無効化します.

# 4.1.6 g\_scr\_color

∽g\_scr\_color関数 —

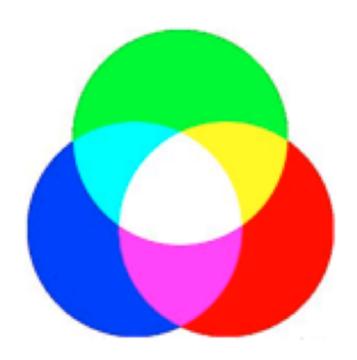
void g\_scr\_color(

float r, float g, float b, float a);

r,g,b,a; 光の三原色+不透明度  $(0 \le r,g,b,a \le 1)$ 

- g\_scr\_color 関数の説明 ------

背景色を設定するための関数です.



## 4.1.7 g\_cls

- g\_cls 関数 🗕

void g\_cls();

- g\_ cls 関数の説明 ——

新しいフレームを背景色で塗りつぶす.

### 4.1.8 g\_finish

-g\_finish関数 ------void g\_finish();

- g\_ finish 関数の説明 -

この関数を呼ぶことで描画することができます。

# 4.1.9 g\_sleep

yoid g\_sleep(
double wait\_time);
wait\_time; 静止時間(秒)

- g\_ sleep 関数の説明 -

指定した砂数だけ静止します.

### 4.1.10 g\_capture\_set, g\_capture

- g\_capture\_set,g\_capture 関数の説明 —

画面を取り込むための準備を行う関数. (g\_capture\_set) 画面を取り込む関数. (g\_capture)

### 4.1.11 g\_enable\_highdpi

-g\_enable\_highdpi 関数 -

void g\_enable\_highdpi();

- g\_enable\_highdpi 関数の説明 -

Apple Retina Display のネイティブ解像度で描画するように指定します. この関数を使用するときは、必ず g\_init(\_core) より前に使用してください.

# 4.1.12 g\_set\_antialiasing

– g\_set\_antialiasing 関数 –

void g\_set\_antialiasing(
 unsigned int level);

level; アンチエイリアシングのレベル

### - g\_set\_antialiasing 関数の説明 🗕

アンチエイリアシングのレベルを指定します.

アンチエイリアシングは線や面の境界で発生するジャギーを低減して滑らかに表示します.

有効な値は 0 (アンチエイリアシングは無効), 1, 2, 3, 4 (最大のクオリティ) ですが,環境によっては有効な最大値が 3 以下かもしれません.デフォルトの値は 0 です.

この関数を使用するときは、必ず g\_init(\_core) より前に使用してください。

# 4.2 補助関数

4.2.1 g\_key\_state, g\_input\_state

- g\_key\_state 関数 —

code;取得する入力のコード

- g\_input\_state 関数 –

code;取得する入力のコード

x,y; 最後にクリックされた位置(標準座標系)を格納する変数へのポインタ(ヌルポインタを許容します。)

- g\_key\_state,g\_input\_state 関数の説明 -

code で指定された入力を取得します. code には char 型のリテラル ('a', '@', '/' 等)か, G\_KEY\_F1, G\_KEY\_LEFT, G\_MOUSE\_LEFT 等の定数を指定します. 各入力の状態は, g\_finish が呼ばれた時点で更新されます. G\_KEY\*\*定数, および G\_INPUT\_STATE の詳細は事項以降を見てください.

- G\_KEY\*\*定数 -

G\_MOUSE\_LEFT, G\_KEY\_INVALID, G\_KEY\_INSERT, G\_KEY\_F1, G\_KEY\_F7, G\_MOUSE\_MIDDLE, G\_KEY\_PAGE\_UP, G\_KEY\_LEFT, G\_KEY\_F2, G\_KEY\_F8, G\_KEY\_F3, G\_KEY\_F9, G\_MOUSE\_LEFT, G\_KEY\_PAGE\_DOWN, G\_KEY\_UP, G\_KEY\_F4, G\_KEY\_F10, G\_KEY\_HOME, G\_KEY\_RIGHT, G\_KEY\_F5, G\_KEY\_F11, G\_KEY\_END, G\_KEY\_DOWN, G\_KEY\_F6, G\_KEY\_F12

```
- G_input_state 詳細 ·
G_NONE;キーは押されていない
G_DOWN;キーが押された
G_UP;キーが解放された
G_REPEAT; キーが押しっぱなし
if(g_key_state('a') == G_DOWN)
{
   //a が入力された時の動作
}
int x, y;
if(g_input_state(G_MOUSE_LEFT, &x, &y) == G_DOWN)
{
   //左クリックされた時の動作
   printf( "x : %d\n" "y : %d\n" , x, y);
}
if(g_input_state(G_MOUSE_LEFT, NULL, NULL) == G_DOWN)
{
   //座標が必要無ければこれでも呼び出せます.
   //x 座標と y 座標両方に NULL を指定するのは g_key_state を使うのと等価です.
}
```

# 4.3 スケール関数

#### 4.3.1 g\_def\_scale\_2D

- g\_def\_scale\_2D 関数 -

void g\_def\_scale\_2D(
 int id,
 double x\_0, double x\_1,
 double y\_0, double y\_1,
 double x\_left\_std, double y\_top\_std,

double width\_std, double height\_std);

id;スケール番号

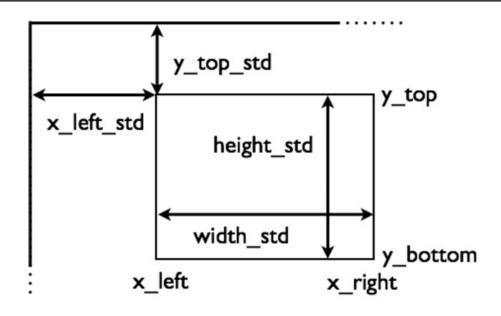
x\_0;自由座標系でのx座標左端 x\_1;自由座標系でのx座標右端 y\_0;自由座標系でのy座標下端 y\_1;自由座標系でのy座標上端

x\_left\_std;標準座標系に定義する描画枠の左端のx座標y\_top\_std;標準座標系に定義する描画枠の左端のy座標

width\_std;標準座標系に定義する描画枠の幅 height\_std;標準座標系に定義する描画枠の高さ

### - g\_def\_scale\_2D 関数の説明 -

標準座標系上に二次元のオブジェクトを描画するための描画枠およびオブジェクトが定義される自由座標系を設定する. g\_def\_scale\_2D では標準座標系が固定座標系の役割を担う.



### 4.3.2 g\_def\_scale\_3D

```
- g_def_scale_3D 関数 -
void g_def_scale_3D(
       int id,
       double x_0, double x_1,
       double y_0, double y_1,
       double z_0, double z_1,
       double x_0_f, double x_1_f,
       double y_0_f, double y_1_f,
       double z_0_f, double z_1_f,
       double x_left_std, double y_top_std,
       double width_std, double height_std);
id;スケール番号
x_0, x_1, y_0, y_1, z_0, z_1; 自由座標系における x, y, z の範囲の端点
x_0_f, x_1_f, y_0_f, y_1_f, z_0_f, z_1_f; 固定座標系における x, y, z の範囲の端点
x_left_std;標準座標系に定義する描画枠の左上端のx座標
y_top_std;標準座標系に定義する描画枠の左上端のy座標
width_std;標準座標系に定義する描画枠の幅
height_std;標準座標系に定義する描画枠の高さ
```

- g\_def\_scale\_3D 関数の説明

標準座標系上に三次元のオブジェクトを描画するための描画枠・描画するための固定座標系・ オブジェクトが定義される自由座標系を設定する.

g\_def\_scale\_3D では、オブジェクトを見るための視点位置・画面上方向・拡大率のデフォルト値が次のように与えられている。

視点位置: eye =  $(1.3(x_1_f - x_0_f), -2.4(y_1_f - y_0_f), 2(z_1_f - z_0_f)) + g$ . ここで、g は固定座標系の重心位置である。

描画オブジェクト空間をどの方向を上として描画するかを決める: up = (0,0,1).

拡大率: zoom = 1.

GLSC3D では、自由座標系を

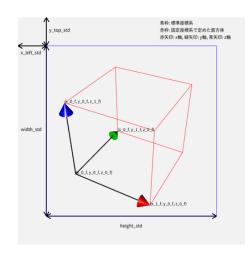
$$x_0 < x_1, y_0 < y_1, z_0 < z_1$$

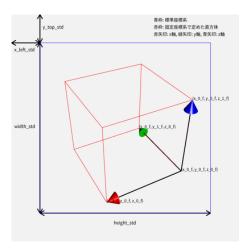
のように定めると "右手系" として定義される。ただし、例えば、 $x_0 > x_1$  のようにある範囲の大小関係を逆転させると、"左手系"として定義される。同様に、この逆転の個数が奇数個であれば "左手系" として描画され、偶数個であれば "右手系" として描画される。

GLSC3D では固定座標系はいつも "右手系" で定められている。従って、いつも

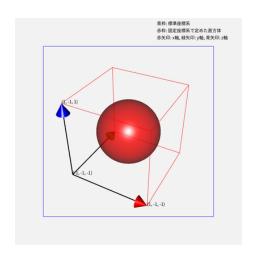
$$x_0_f < x_1_f, y_0_f < y_1_f, z_0_f < z_1_f$$

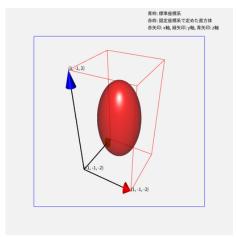
となるように設定する必要があることに注意せよ. ( $\times x_0_f \ge x_1_f$  のように設定するとエラーとなり強制的に終了する)





左図は GLSC3D が提供する標準的な  $g_{def_scale_3D}$  による描画例。右図は左図に対して,自由座標系を  $x_0 > x_1$  となるように定めた場合の描画例であり,左手系として描画されていることを確認できる.





左図は固定座標系が定める直方体の縦横比が 1:1:1 の描画例. 右図は左図に対して,固定座標系における z の範囲を 2 倍とした描画例. 固定座標系における z 方向の範囲が 2 倍になるので,球体も z 方向に 2 倍だけ引き延ばされることに注意.

#### 4.3.3 g\_def\_scale\_3D\_fix

-g\_def\_scale\_3D\_fix 関数 -

double x\_0\_f, double x\_1\_f,

double y\_0\_f, double y\_1\_f,

double z\_0\_f, double z\_1\_f,

double x\_left\_std, double y\_top\_std,

double width\_std, double height\_std);

id;スケール番号

 $x_0_f, x_1_f, y_0_f, y_1_f, z_0_f, z_1_f;$  固定座標系における x, y, z の範囲の端点

x\_left\_std;標準座標系に定義する描画枠の左端のx座標

y\_top\_std;標準座標系に定義する描画枠の左端のy座標

width\_std;標準座標系に定義する描画枠の幅

height\_std:標準座標系に定義する描画枠の高さ

#### - g\_def\_scale\_3D\_core 関数の説明 -

標準座標系上に三次元のオブジェクトを描画するための描画枠・描画するための固定座標系を設定する。 $g_{def_scale_3D_fix}$ では, $g_{def_scale_3D}$ に比べて引数が少ない。これは,オブジェクトを定義する自由座標系を内部的に,固定座標系として設定しているためである。従って, $g_{def_scale_3D}$ と同様に,固定座標系は

$$x_0_f < x_1_f, y_0_f < y_1_f, z_0_f < z_1_f$$

となるように設定する必要があることに注意せよ。このことからわかるように、 $g_{def_scale_3D_fix}$ では "右手系"の描画オブジェクト空間のみ設定できる。視点位置・画面上方向・拡大率は $g_{def_scale_3D}$ と同じである。

### 4.3.4 g\_vision

```
- g_vision 関数 -
```

```
void g_vision(
    int id,
    double eye_x, double eye_y, double eye_z,
    double up_x, double up_y, double up_z,
    double zoom);
```

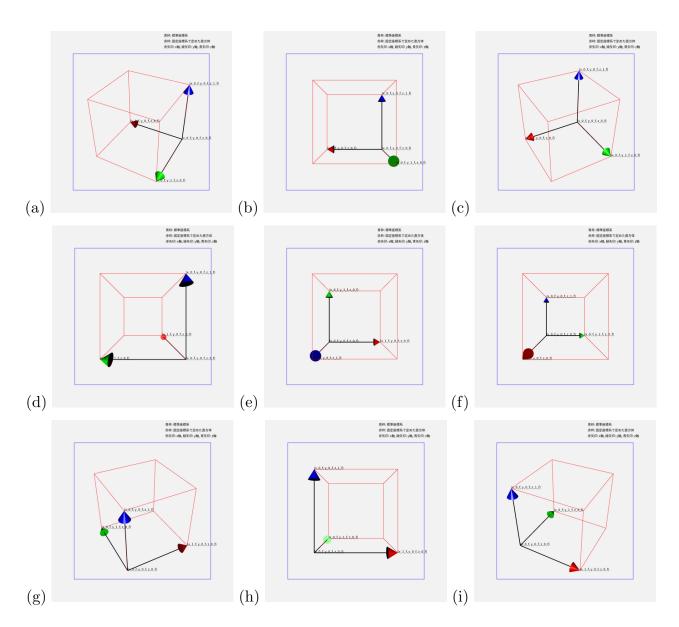
id;スケール番号

eye\_x, eye\_y, eye\_z; 視点位置を指定するベクトルの座標up\_x, up\_y, up\_z; 画面上方向を指定するベクトルの座標

zoom;拡大率

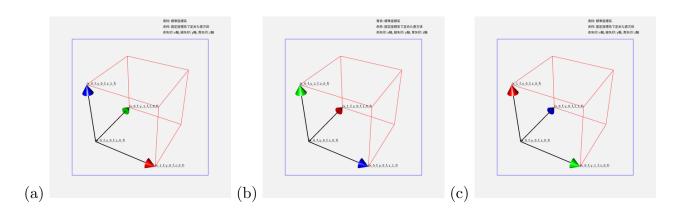
# - g\_vision 関数の説明 —

g\_def\_scale\_3D もしくは g\_def\_scale\_3D\_fix で定められているデフォルトの視点位置・画面上方向・拡大率を任意に変更できる。視点位置は固定座標系の重心位置 g からの相対位置であることに注意せよ (次のページの図 (e) 参照)。また,画面上方向と視点位置は平行であってはならないことにも注意せよ。

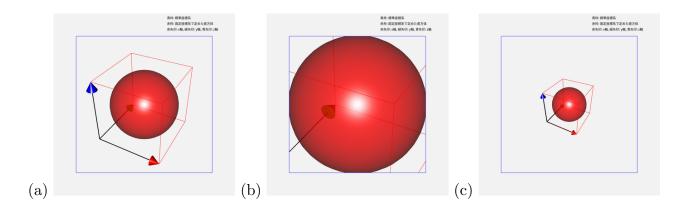


デフォルトの視点位置を (eye\_std\_x, eye\_std\_y, eye\_std\_z) として,

- (a) (-eye\_std\_x, -eye\_std\_y, -eye\_std\_z).
- (b) (0, -1, 0).
- (c) (eye\_std\_x, -eye\_std\_y, eye\_std\_z).
- (d) (-1,0,0).
- (e)  $(0+\varepsilon,0+\varepsilon,1)$ . (※  $\pmb{up}=(0,0,1)^T$  の場合、視点位置を真上や真下に設定するときには、このように多少ずらさなければならない。)
- (f) (1,0,0).
- $(g) (-eye\_std\_x, eye\_std\_y, eye\_std\_z).$
- (h) (0,1,0).
- (i) (eye\_std\_x, eye\_std\_y, eye\_std\_z).



(a) デフォルトの画面上方向は (0,0,1) である. (b) (0,1,0) に設定した状態. (c) (1,0,0) に設定した状態. (b) と (c) は, (a) と同じ見た目になるように視点方向がデフォルトから変更されている.



(a) デフォルトの zoom = 1 で描画された球体. (b) zoom = 2 で描画された球体. 球体が 2 倍に拡大される. (c) zoom = 0.5 で描画された球体. 球体が 0.5 倍に縮小される.

### 4.3.5 g\_sel\_scale

- g\_sel\_scale 関数の説明 -

定義された id 番号の座標系 (g\_def\_scale\_\*) を選択する.

### 4.3.6 g\_clipping

```
yoid g_clipping(
G_BOOL value);

value; G_YES or G_NO
```

### - g\_clipping 関数の説明 -

デフォルトでは g\_clipping(G\_YES) が設定されており、この場合は各スケール番号ごと に用意された標準座標系内においてオブジェクトが描画される。g\_clipping(G\_NO) を g\_sel\_scale\_\*(id) の後に呼ぶと、選ばれたスケール番号の描画が設定されたスクリーン 全体に渡って描画される。g\_sel\_scale が呼ばれると g\_clipping(G\_YES) が選択されて いることに注意。

# 4.4 属性コントロール関数

### 4.4.1 g\_marker\_color

```
g_marker_color 関数

void g_marker_color(
float r, float g, float b, float a);
r,g,b,a;光の三原色+不透明度 (0≤r,g,b,a≤1)
```

- g\_marker\_color 関数の説明 — マーカーの色を変更する.

### 4.4.2 g\_marker\_size

```
g_marker_size 関数

void g_marker_size(
float size);
size; マーカーの大きさ(ピクセル単位)
```

- g\_marker\_size 関数の説明 —

マーカーの大きさを変更する.ピクセル単位の直径を指定する.

### 4.4.3 g\_marker\_radius

```
g_marker_radius 関数

void g_marker_radius(
 float size);

size; マーカーの大きさ(自由座標系での半径)
```

- g\_marker\_radius 関数の説明 —

マーカーの大きさを変更する. 自由座標系での半径を指定する.

### 4.4.4 g\_marker\_type

- g\_marker\_type 関数 -

void g\_marker\_type(

unsigned int type);

type;マーカーの種類

- g\_marker\_type 関数の説明 -

マーカーの種類を変更する. 使用できるマーカーの種類は以下の通り.

定数名	値	形状
G_MARKER_SQUARE	0	正方形
G_MARKER_CIRCLE	1	円
G_MARKER_SPHERE	2	球

### マーカーに関するパフォーマンス上の注意 -

マーカータイプの変更はシェーダーの切り替えを伴うため、できるだけ同じ種類のマーカーをまとめて描画するようにすること.

また、マーカーサイズの変更は問題ないが、マーカーサイズの座標系 (g\_marker\_size または g\_marker\_radius) の変更もシェーダーの切り替えを伴うため、できるだけ同じ座標系のマーカーサイズをまとめて使用すること。

### 4.4.5 g\_def\_marker

- g\_def\_marker 関数の説明 -

マーカーの属性セットを定義する.

### 4.4.6 g\_sel\_marker

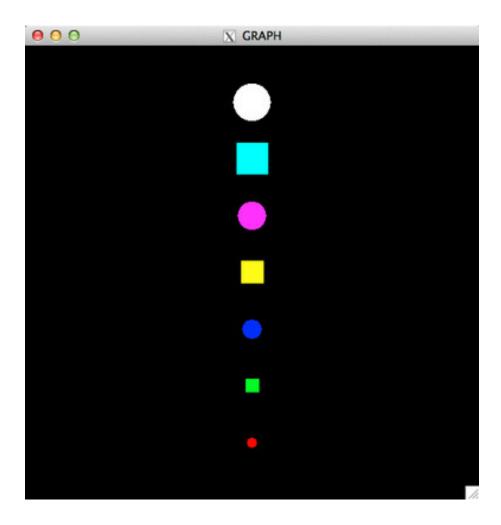
```
g_sel_marker 関数

void g_sel_marker(
    int id);

id;マーカーの属性番号
```

-g\_sel\_marker 関数の説明 -

マーカーの属性セットを選択する.



```
4.4.7 g_line_color
 - g_line_color 関数 —
 void g_line_color(
         float r,float g,float b,float a);
 r,g,b,a; 光の三原色+不透明度 (0 \le r,g,b,a \le 1)
 - g_line_color 関数の説明 ———
 線の色を変更する.
4.4.8 g_line_width
 - g_line_width 関数 -
 void g_line_width(
         float size);
 size;線の太さ
 - g_line_width 関数の説明 -
 線の太さを変更する.
4.4.9 g_line_type
 – g_line_type 関数 –
 void g_line_type(
         int type);
 type;線の種類 (0~8)
 - g_line_type 関数の説明 -
 線の種類を変更する.
```

# 4.4.10 g\_def\_line

# - g\_def\_line 関数の説明 -

線の属性セットを定義する.

# 4.4.11 g\_sel\_line

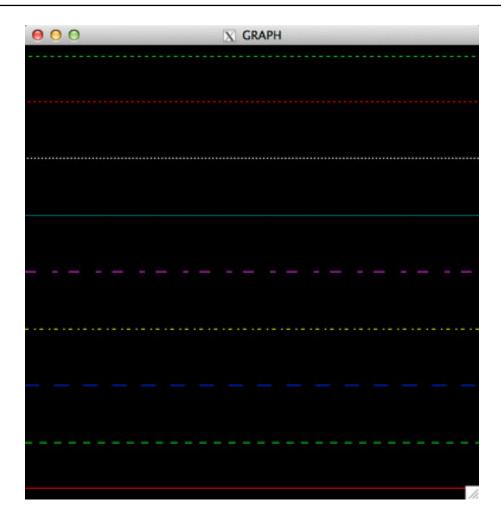
g\_sel\_line 関数

void g\_sel\_line(
 int id);

id;線の属性番号

- g\_sel\_line 関数の説明 -

線の属性セットを選択する.



# 4.4.12 g\_area\_color

- g\_area\_color 関数 -

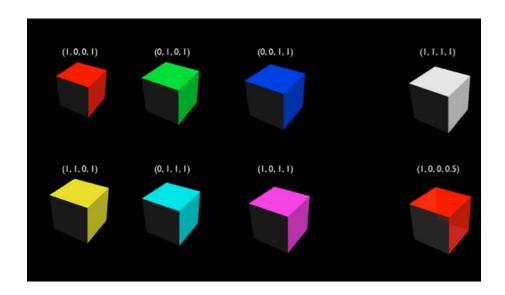
void g\_area\_color(

float r, float g, float b, float a);

r,g,b,a; 光の三原色+不透明度  $(0 \le r,g,b,a \le 1)$ 

-g\_area\_color\_2D,g\_area\_color\_3D 関数の説明 -

面を塗りつぶす色を変更する.



```
4.4.13 g_def_area_2D, g_def_area_3D

g_def_area_2D, g_def_area_3D 関数

void g_def_area_2D(
    int id,
    float r, float b, float g, float a);

void g_def_area_3D(
    int id,
    float r, float b, float g, float a);

id; 塗りつぶしの属性番号

r,g,b,a; 光の三原色+不透明度 (0 ≤ r,g,b,a ≤ 1)

g_def_area_2D, g_def_area_3D 関数の説明

塗りつぶしの属性セットを定義する.
```

4.4.14 g\_sel\_area\_2D, g\_sel\_area\_3D

g\_sel\_area\_2D, g\_sel\_area\_3D 関数

void g\_sel\_area\_2D(
 int id);

void g\_sel\_area\_3D(
 int id);

id; 塗りつぶしの属性番号

- g\_sel\_area\_2D, g\_sel\_area\_3D 関数の説明 ————— 塗りつぶしの属性セットを選択する.

### 4.4.15 g\_text\_color

 $g_{\text{text\_color}}$ 関数 - void  $g_{\text{text\_color}}($  float r, float g, float b, float a); r,g,b,a; 光の三原色+不透明度  $(0 \le r,g,b,a \le 1)$ 

- g\_text\_color 関数の説明 -テキストの色を変更する.

### 4.4.16 g\_text\_font\_core

void g\_text\_font\_core(

const char \*font\_file);

const char \*font\_file; テキストのフォントを相対パス名で指定する. テキストのフォントは ttf(True Type Font), otf(Open Type Font) などの主要な形式を指定できる.

- g\_text\_font\_core 関数の説明 — テキストのフォントを変更する.

# 4.4.17 g\_text\_size

/ g\_text\_size 関数 ————
void g\_text\_size(
float size);
size; テキストのサイズを指定する.

- g\_text\_font\_core 関数の説明 — テキストのサイズを変更する.

```
4.4.18 g_def_text, g_def_text_core, g_sel_text
 - g_def_text 関数 -
 void g_def_text(
         int id,
         float r, float g, float b, float a,
        unsigned int font_size);
 id; テキストの属性番号
 r,g,b,a; 光の三原色+不透明度 (0 \le r,g,b,a \le 1)
 font_size; テキストのサイズ(自然数)
 - g_def_text 関数の説明 🗕
 テキストの属性セットを定義する.
 - g_def_text_core 関数 -
 void g_def_text_core(
         int id,
         float r, float g, float b, float a,
         const char *font_type, unsigned int font_size);
 id; テキストの属性番号
 r,g,b,a; 光の三原色+不透明度 (0 < r,g,b,a < 1)
 font_type; フォントファイル名, または NULL
 font_size; テキストのサイズ(自然数)
 - g_def_text 関数の説明 🗕
 テキストの属性セットを定義する. font_type==NULL のとき, 色とサイズのみ使用される.
 - g_sel_text 関数 -
 void g_sel_text(
         int id);
 id:線の属性番号
 - g_sel_text 関数の説明 —
 テキストの属性セットを選択する.
```

# 4.5 描画関数

4.5.1 g\_marker\_2D, g\_marker\_3D

### 4.5.2 g\_text\_standard

```
      g_text_standard 関数

      void g_text_standard(

      double x, double y,

      const char *str);

      x,y; テキスト左下の座標 (標準座標系)

      str; 文字列
```

- g\_text\_standard 関数の説明 —

文字列を描画する. (座標指定が標準座標系であることに注意.)

## 4.5.3 g\_text\_virtual\_2D, g\_text\_virtual\_3D

- g\_text\_virtual\_2D,g\_text\_virtual\_3D 関数の説明 ----

文字列を描画する. (座標指定が自由座標系であることに注意.)

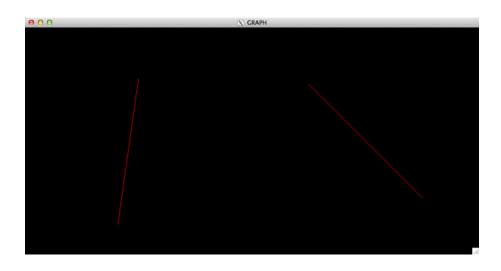
```
4.5.4 g_move_2D, g_move_3D
```

-g\_move\_2D, g\_move\_3D 関数の説明 ---

線の始点を指定する.

### 4.5.5 g\_plot\_2D, g\_plot\_3D

- g\_plot\_2D, g\_plot\_3D 関数の説明 — 線の終点を指定する.



### 4.5.6 g\_box\_2D

- g\_box\_2D 関数 -

void g\_box\_2D(

double x\_left, double x\_right,
double y\_bottom, double y\_top,

G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

x\_left, x\_right; 両端のx座標y\_bottom, y\_top; 両端のy座標

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

# - g\_box\_2D 関数の説明 -

長方形を描画する.

Ver 3.0 以降: GLSC3D Ver.2.x とは引数が変更されているので注意.

旧仕様は g\_box\_center\_2D

#### 4.5.7 g\_box\_3D

- g\_box\_3D 関数 ·

void g\_box\_3D(

double x0, double x1,
double x0, double x1,
double z0, double z1,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

x0, x1; 両端のx座標y0, y1; 両端のy座標z0, z1; 両端のz座標

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

### - g\_box\_3D 関数の説明 ·

直方体を描画する.

Ver 3.0 以降: GLSC3D Ver.2.x とは引数が変更されているので注意.

旧仕様は g\_box\_center\_3D

### 4.5.8 g\_box\_3D\_core

### - g\_box\_3D\_core 関数の説明 -

直方体を描画する. (DivideLevel の設定が可能)

Ver 3.0 以降: GLSC3D Ver.2.x とは引数が変更されているので注意.

旧仕様は g\_box\_center\_3D\_core

### 4.5.9 g\_box\_center\_2D

-g\_box\_center\_2D 関数 -

x,y;重心の座標

width, height;幅と高さ

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_box\_center\_2D 関数の説明 -

長方形を描画する.

### 4.5.10 g\_box\_center\_3D

-g\_box\_center\_3D 関数 -

void g\_box\_center\_3D(

double x, double y, double z,
double width, double height, double depth
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

x,y,z;重心の座標

width, height, depth;幅と高さと奥行き

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_box\_center\_3D 関数の説明 🗕

直方体を描画する.

#### 4.5.11 g\_box\_center\_3D\_core

- g\_box\_center\_3D\_core 関数 -

void g\_box\_center\_3D\_core(

double x, double y, double z,

double width, double height, double depth,

int DivideLevel,

G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

x,y,z;重心の座標

width, height, depth; 幅と高さと奥行き

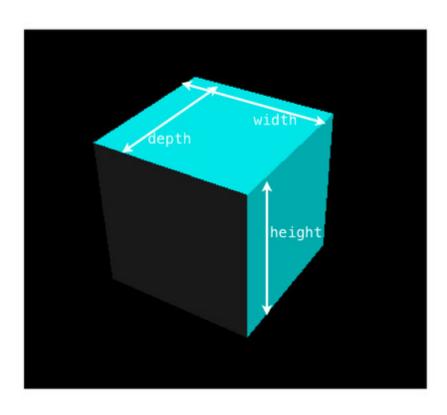
DivideLevel;面の三角形分割レベル (4DivideLevel 倍ずつ三角形の分割数が増える)

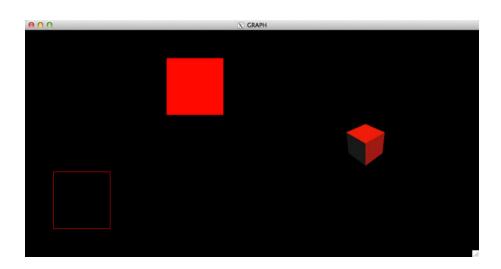
Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない

Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_box\_center\_3D\_core 関数の説明 —

直方体を描画する. (DivideLevel の設定が可能)





# 4.5.12 g\_sphere\_3D

- g\_sphere\_3D 関数 -

x,y,z;重心の座標

radius; 半径

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

# - g\_sphere\_3D 関数の説明 -

球を描画する.

Ver 3.0 以降: この関数を小さな球を大量に表示する目的には使用しないでください. 代わりに球マーカーを使用してください.

#### 4.5.13 g\_sphere\_3D\_core

- g\_sphere\_3D\_core 関数 -

void g\_sphere\_3D\_core(

double x, double y, double z,

double radius,

int FaceNumberLevel, int DivideLevel,

G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

x,y,z;重心の座標

radius; 半径

FaceNumberLevel;球面の分割レベル

DivideLevel;面の三角形分割レベル (4DivideLevel 倍ずつ三角形の分割数が増える)

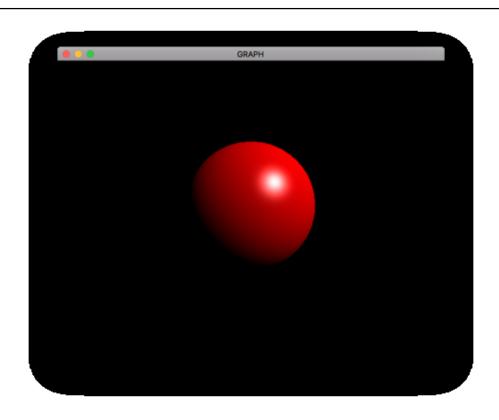
Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない

Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

# - g\_sphere\_3D\_core 関数の説明 ·

球を描画する. (より細かい設定が可能)

Ver 3.0 以降: この関数を小さな球を大量に表示する目的には使用しないでください。 代わりに球マーカーを使用してください。



### 4.5.14 g\_ellipse\_3D

-g\_ellipse\_3D 関数 -

void g\_ellipse\_3D(

double x, double y, double z,
double Sx, double Sy, double Sz,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

x,y,z;重心の座標

Sx,Sy,Sz; x,y,z方向へのスケーリング率

direction;向き

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_ellipse\_3D 関数の説明 -

楕円球を描画する.

#### 4.5.15 g\_ellipse\_3D\_core

- g\_ellipse\_3D\_core 関数 -

void g\_ellipse\_3D\_core(

double x, double y, double z,

double Sx, double Sy, double Sz,

double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,

int FaceNumberLevel, int DivideLevel,

G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

x,y,z;重心の座標

Sx,Sy,Sz; x,y,z 方向へのスケーリング率

direction;向き

FaceNumberLevel;球面の分割レベル

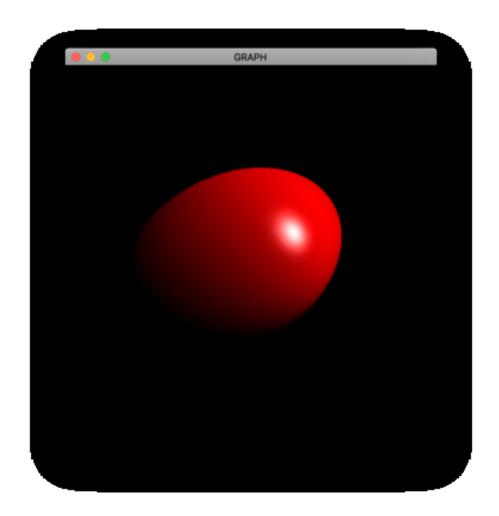
DivideLevel;面の三角形分割レベル (4DivideLevel 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない

Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_ellipse\_3D\_core 関数の説明 —

楕円球を描画する. (より細かい設定が可能)



### 4.5.16 g\_prism\_3D

-g\_prism\_3D 関数 -

void g\_prism\_3D(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double radius, double height, double psi, int N,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center;重心の座標 direction;向き radius;半径

psi; direction に対する回転角

N;側面の数

height;高さ

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_prism\_3D 関数の説明 ——

角柱を描画する.

#### 4.5.17 g\_prism\_3D\_core

-g\_prism\_3D\_core関数 -

void g\_prism\_3D\_core(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double radius, double height, double psi, int N,
int DivideLevel, G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center;重心の座標

direction;向き

radius;半径 height;高さ

psi; direction に対する回転角

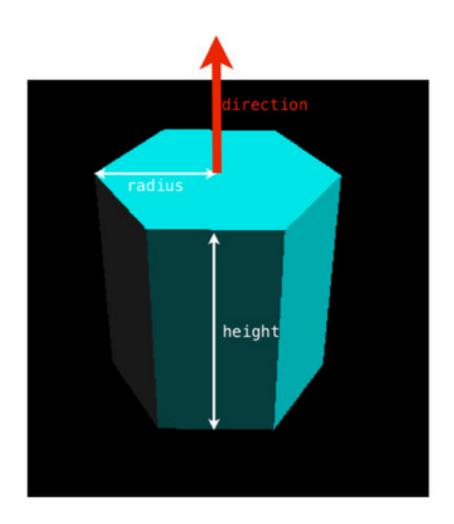
N;側面の数

DivideLevel;面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

-g\_prism\_3D\_core関数の説明 -

角柱を描画する. (より細かい設定が可能)



### 4.5.18 g\_cylinder\_3D

-g\_cylinder\_3D関数 -

void g\_cylinder\_3D(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double radius, double height, double psi,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center;重心の座標 direction;向き radius;半径

height;高さ

psi; direction に対する回転角

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_cylinder\_3D 関数の説明 -

円柱を描画する.

#### 4.5.19 g\_cylinder\_3D\_core

-g\_cylinder\_3D\_core関数 -

void g\_cylinder\_3D\_core(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double radius, double height, double psi,

int N, int DivideLevel,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center; 重心の座標

direction;向き

radius;半径 height;高さ

psi; direction に対する回転角

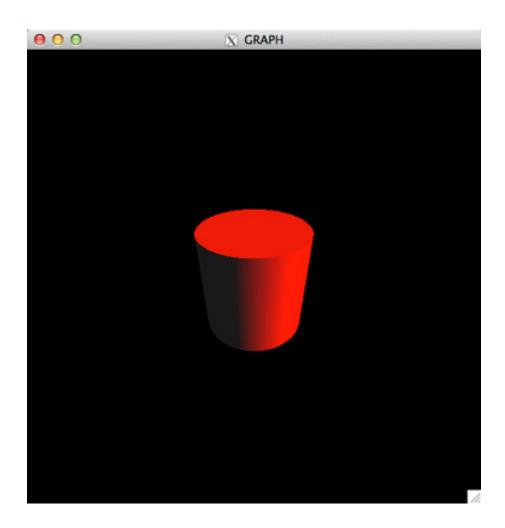
N:側面の数

DivideLevel;面の三角形分割レベル (4DivideLevel 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_cylinder\_3D\_core 関数の説明 ·

円柱を描画する. (より細かい設定が可能)



# 4.5.20 g\_cone\_3D

- g\_cone\_3D 関数 -

void g\_cone\_3D(

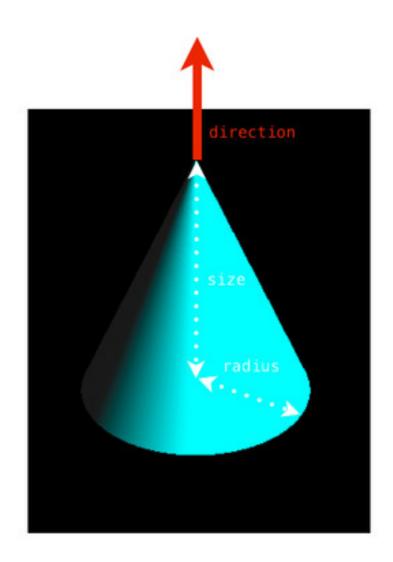
double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double radius, double head\_size
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center; 重心の座標 direction;向き radius;半径 head\_size;高さ

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_cone\_3D 関数の説明 -

円錐を描画する.



#### 4.5.21 g\_cone\_3D\_core

- g\_cone\_3D\_core 関数 -

void g\_cone\_3D\_core(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,

double radius, double head\_size,

int N, int DivideLevel,

G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center; 重心の座標

direction;向き

radius; 半径

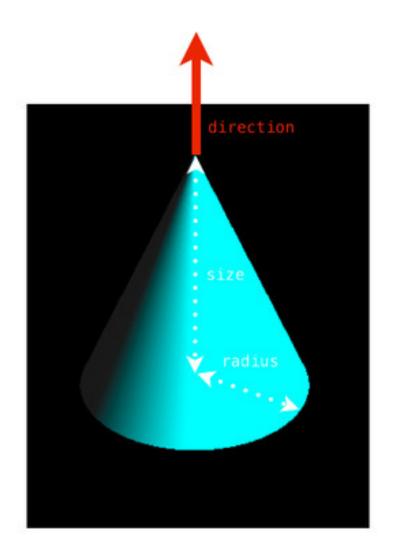
head\_size;高さ N;円周の分割数

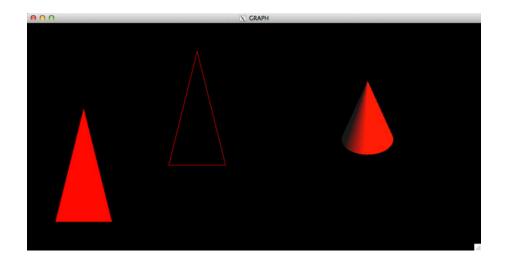
DivideLevel;面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_cone\_3D\_core 関数の説明 -

円錐を描画する. (より細かい設定が可能)





### 4.5.22 g\_pyramid\_3D

-g\_pyramid\_3D関数-

void g\_pyramid\_3D(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double radius, double head\_size, double psi, int N,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center;重心の座標 direction;向き radius;半径

 $head_size$  ; 高さ

psi; direction に対する回転角

N;側面の数

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

-g\_pyramid\_3D 関数の説明 —

角錐を描画する.

#### 4.5.23 g\_pyramid\_3D\_core

-g\_pyramid\_3D\_core関数 -

void g\_pyramid\_3D\_core(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double radius, double head\_size, double psi, int N,
int DivideLevel, G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center; 重心の座標

direction;向き

radius; 半径

head\_size;高さ

psi; direction に対する回転角

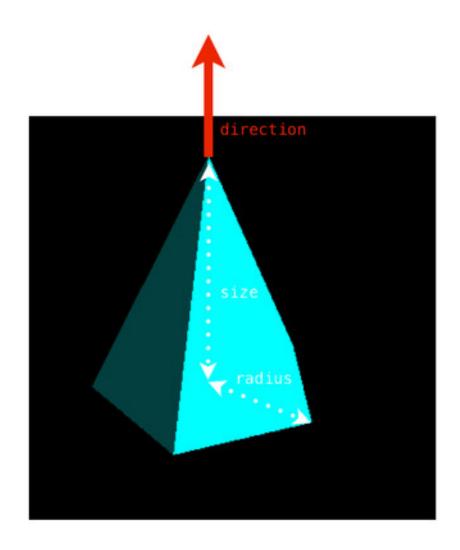
N;側面の数

DivideLevel;面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

-g\_pyramid\_3D\_core関数の説明 -

角錐を描画する. (より細かい設定が可能)



# 4.5.24 g\_arrow\_2D

-g\_arrow\_2D 関数 -

base;根元の座標 direction;向き

 $arrow_size$ ; 全体の長さ  $head_size$ ; 傘の部分の長さ type; 矢印の種類  $(0\sim 2)$ 

- g\_arrow\_2D 関数の説明 —

矢印を描画する.

### 4.5.25 g\_arrow\_3D

-g\_arrow\_3D 関数 -

void g\_arrow\_3D(

double base\_x, double base\_y, double base\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double arrow\_size, double head\_size,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

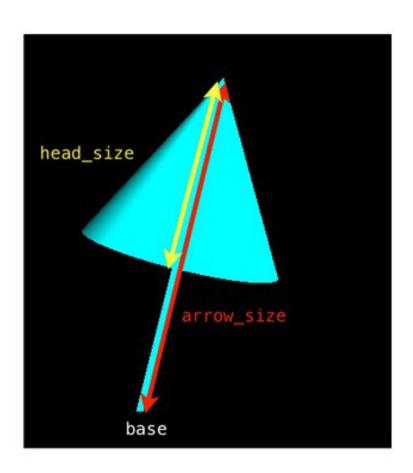
base;根元の座標 direction;向き

arrow\_size;全体の長さ head\_size;傘の部分の長さ

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_arrow\_3D 関数の説明 -

矢印を描画する.



#### 4.5.26 g\_arrow\_3D\_core

-g\_arrow\_3D\_core関数 -

void g\_arrow\_3D\_core(

double base\_x, double base\_y, double base\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double arrow\_size, double head\_size,
int N, int DivideLevel,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

base;根元の座標 direction;向き

arrow\_size;全体の長さ head\_size;傘の部分の長さ

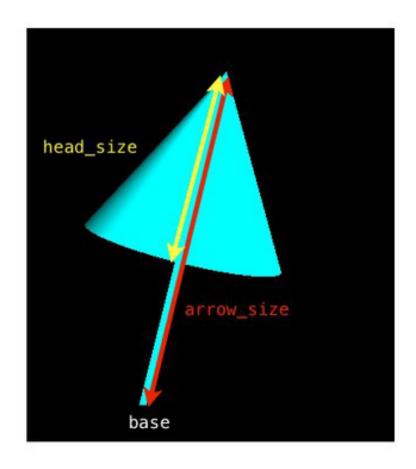
N;傘の部分の分割数

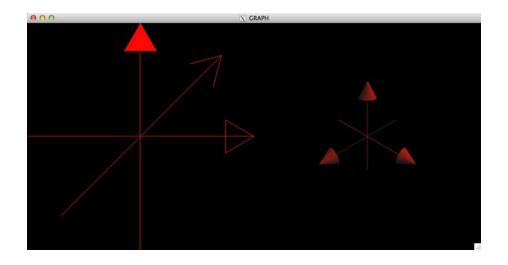
DivideLevel;面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_arrow\_3D\_core 関数の説明 🗕

矢印を描画する. (より細かい設定が可能)





# 4.5.27 g\_triangle\_2D

# - g\_triangle\_2D 関数の説明 -

三角形を描画する.

### 4.5.28 g\_triangle\_3D

-g\_triangle\_3D関数 -

void g\_triangle\_3D(

double x0, double y0, double z0,
double x1, double y1, double z1,
double x2, double y2, double z2,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

x,y,z;各頂点の座標

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

# -g\_triangle\_3D 関数の説明 -

### 4.5.29 g\_triangle\_3D\_core

-g\_triangle\_3D\_core関数 -

void g\_triangle\_3D\_core(

double x0, double y0, double z0,

double x1, double y1, double z1,

double x2, double y2, double z2,

int DivideLevel, G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

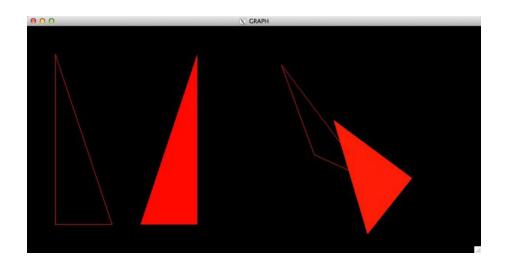
x,y,z;各頂点の座標

DivideLevel;面の三角形分割レベル (4DivideLevel 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない

Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

# -g\_triangle\_3D\_core 関数の説明 -



### 4.5.30 g\_triangle\_3D\_smooth

-g\_triangle\_3D\_smooth関数 -

void g\_triangle\_3D\_smooth(

double x0, double y0, double z0, double x1, double y1, double z1, double x2, double y2, double z2, double nx0, double ny0, double nz0, double nx1, double ny1, double nz1, double nx2, double ny2, double nz2, G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

x,y,z;各頂点の座標

nx,ny,nz; 各頂点での法線ベクトルの x,y,z 成分

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない

Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

# -g\_triangle\_3D\_smooth 関数の説明・

#### 4.5.31 g\_triangle\_3D\_smooth\_core

-g\_triangle\_3D\_smooth\_core 関数の説明 -

# 4.5.32 g\_fan\_2D

```
- g_fan_2D 関数 -
```

void g\_fan\_2D(

double center\_x, double center\_y,
double direction\_x, double direction\_y,
double radius, double angle,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center;中心の座標

radius;半径

direction;向き

angle;扇の中心角

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_fan\_2D 関数の説明 -

扇形を描画する.

### 4.5.33 g\_fan\_3D

-g\_fan\_3D 関数 -

void g\_fan\_3D(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double radius, double angle, double psi,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center;中心の座標 direction;向き radius;半径

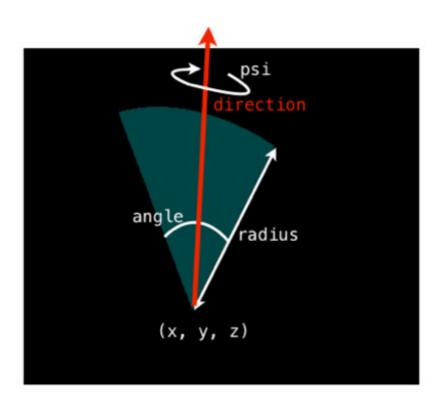
angle;扇の中心角

psi; direction に対する回転角

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_fan\_3D 関数の説明 -

扇形を描画する.



#### 4.5.34 g\_fan\_3D\_core

-g\_fan\_3D\_core 関数 -

void g\_fan\_3D\_core(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,

double radius, double angle, double psi,

int FaceNumberLevel, int DivideLevel, G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center; 中心の座標

direction;向き

radius; 半径

angle;扇の中心角

psi; direction に対する回転角

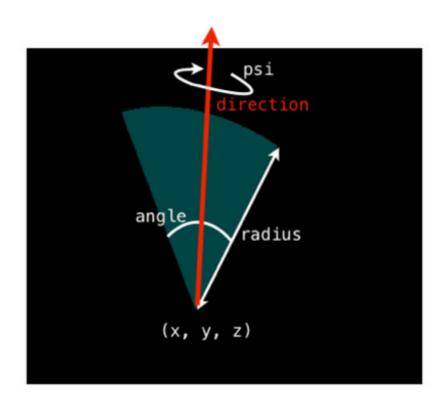
FaceNumberLevel;扇形の分割レベル

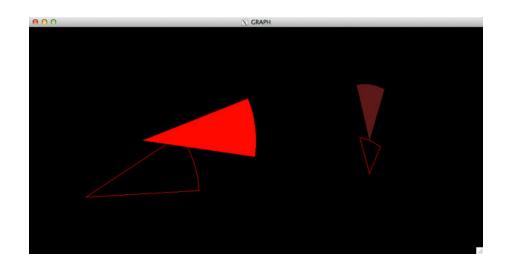
DivideLevel;面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

# - g\_fan\_3D\_core 関数の説明 **-**

扇形を描画する. (より細かい設定が可能)





# 4.5.35 g\_circle\_2D

~g\_circle\_2D関数 —

center;中心の座標

radius; 半径

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_circle\_2D 関数の説明 —

円を描画する.

# 4.5.36 g\_circle\_3D

-g\_circle\_3D関数 -

void g\_circle\_3D(

double center\_x, double center\_y,
double radius, double theta, double phi,
G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center; 中心の座標

radius; 半径 psi; 半径 theta; 半径

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かないFill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_circle\_3D 関数の説明 -

円板を描画する.

#### 4.5.37 g\_circle\_3D\_core

-g\_circle\_3D\_core関数 -

void g\_circle\_3D\_core(

double center\_x, double center\_y,

double radius, double theta, double phi,

int N, int DivideLevel, G\_BOOL Wire, G\_BOOL Fill);

center;中心の座標

radius; 半径

psi;半径

theta; 半径

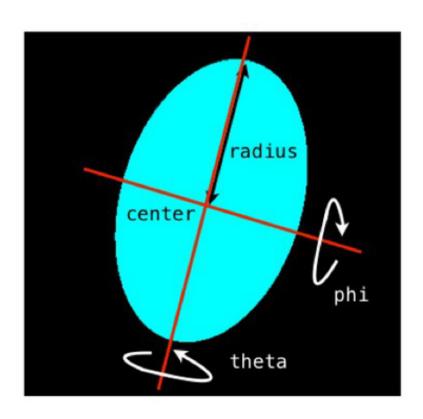
N;円周の分割数

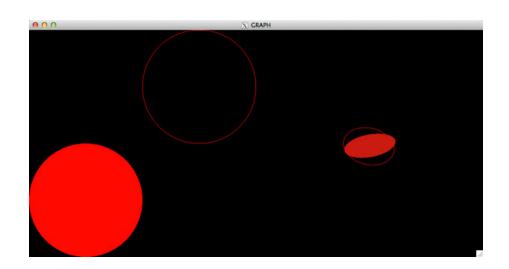
DivideLevel; 面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

-g\_circle\_3D\_core 関数の説明 -

円板を描画する. (より細かい設定が可能)





## 4.5.38 g\_polygon\_2D

-g\_polygon\_2D関数 -

void g\_polygon\_2D(

double \*xx, double \*yy,

int n, G\_BOOL WIRE, G\_BOOL FILL);

xx,yy;頂点データを格納した一次元配列

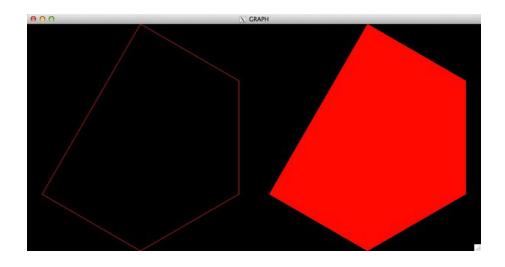
n;配列の数

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない

Fill;  $G_YES$ :塗りつぶす,  $G_NO$ :塗りつぶさない

## - g\_polygon\_2D 関数の説明 🗕

多角形を描画する.



## 4.5.39 g\_polyline\_2D

```
    g_polyline_2D 関数 —

void g_polyline_2D(
    double *xx, double *yy,
    int n);

xx,yy;頂点データを格納した一次元配列
```

XX, yy, JAM / / EMM C/C MILITI

n;配列の数

- g\_polyline\_2D 関数の説明 —

与えられた点列を線分で連続的に結んだものを描画する.

## 4.5.40 g\_polyline\_3D

-g\_polyline\_3D関数 -

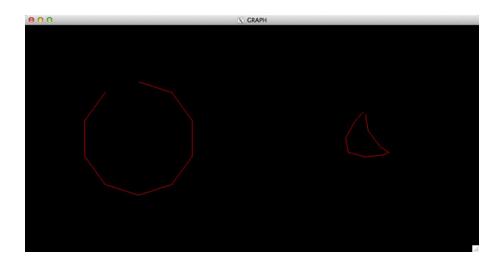
void g\_polyline\_3D(
 double \*xx, double \*yy, double \*zz,
 int n);

xx,yy,zz;頂点データを格納した一次元配列

n;配列の数

- g\_polyline\_3D 関数の説明 —

与えられた点列を線分で連続的に結んだものを描画する.



#### 4.5.41 g\_rectangle\_3D

-g\_rectangle\_3D 関数 -

void g\_rectangle\_3D(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double width, double depth, double psi,
G\_BOOL WIRE, G\_BOOL FILL);

center; 重心の座標 direction; 向き

width, height, depth;幅,高さ,奥行き

psi; direction に対する回転角

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_rectangle\_3D 関数の説明 -

長方形を描画する.

#### 4.5.42 g\_rectangle\_3D\_core

-g\_rectangle\_3D\_core関数 -

void g\_rectangle\_3D\_core(

double center\_x, double center\_y, double center\_z,
double direction\_x, double direction\_y, double direction\_z,
double width, double depth, double psi,
int DivideLevel, G\_BOOL WIRE, G\_BOOL FILL);

center; 重心の座標

direction;向き

width, height, depth;幅,高さ,奥行き

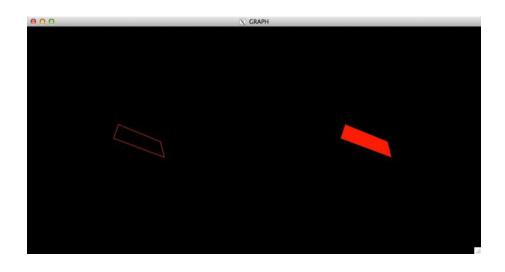
psi; direction に対する回転角

DivideLevel;面の三角形分割レベル (4DivideLevel 倍ずつ三角形の分割数が増える)

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

- g\_rectangle\_3D\_core 関数の説明 ·

長方形を描画する. (より細かい設定が可能.)



## 4.5.43 g\_data\_plot\_2D

```
g_data_plot_2D 関数

void g_data_plot_2D(

double x0, double x1,

double y0, double y1,

int number_x,

double u[number_x]);

x,y; 描画範囲の指定

number; 配列 u のサイズ

u; データの格納された 1 次元配列
```

- g\_data\_plot\_2D 関数の説明 ·

1次元配列 u のデータをプロットする.

## 4.5.44 g\_data\_plot\_3D

- g\_data\_plot\_3D 関数の説明 -

2 次元配列 u のデータをプロットする. (2 次元配列化\*に関しては前章をお読みください.)

### 4.5.45 g\_data\_plot\_f\_3D

```
yoid g_data_plot_f_3D(
double x0, double x1,
double y0, double y1,
double z0, double z1,
int number_x, int number_y,
double *u);
```

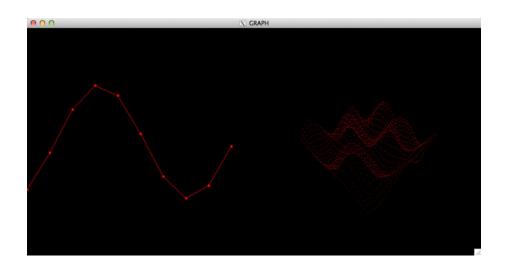
x,y,z; 描画範囲の指定

number;配列 u の各方向のサイズ

u;1次元配列を2次元配列化\*した配列

# - g\_data\_plot\_f\_3D 関数の説明 -

1 次元配列 u のデータをプロットする. (2 次元配列化\*に関しては前章をお読みください.)



# $4.5.46 \quad \texttt{g\_boundary}$

- g\_boundary 関数 ----

void g\_boundary();

- g\_boundary 関数の説明 --

g\_sel\_scale 関数で選択されているスケール番号の描画枠の枠線を描画する.

## 4.6 上位関数

#### 4.6.1 g\_contln\_2D

-g\_contln\_2D 関数 -

x,y;描画範囲の指定

N;配列uの各方向のサイズ

data2D; データの格納された 2 次元配列もしくは 1 次元配列を 2 次元配列化\*した配列

level;等高線を引きたい値。

## - g\_contln\_2D 関数の説明 -

2 次元配列 u に対して,値 level に等高線を描画する.(2 次元配列化\*に関しては前章をお読みください.)

#### 4.6.2 g\_contln\_f\_2D

-g\_contln\_f\_2D関数 -

x,y;描画範囲の指定

N;配列uの各方向のサイズ

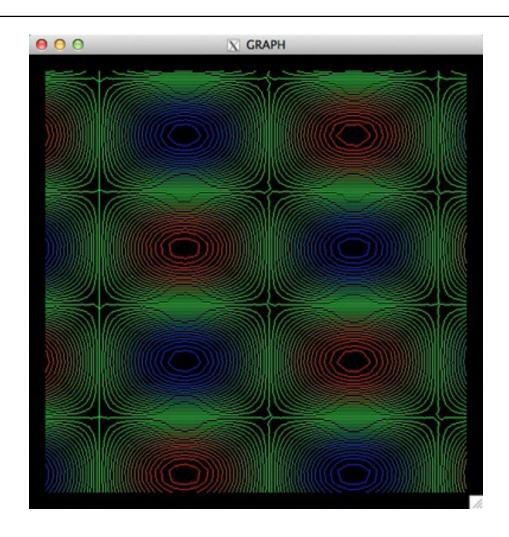
double level);

data2D; データの格納された, 1次元配列を2次元配列化\*した配列

level;等高線を引きたい値.

## - g\_contln\_f\_2D 関数の説明 ———

1 次元配列 u に対して,値 level に等高線を描画する.(2 次元配列化\*に関しては前章をお読みください.)



#### 4.6.3 g\_bird\_view\_3D

-g\_bird\_view\_3D関数 -

void g\_bird\_view\_3D(

double x\_left, double x\_right,
double y\_bottom, double y\_top,
int number\_x, int number\_y,
double u[number\_x][number\_y],
G\_BOOL WIRE, G\_BOOL FILL);

x,y,z;描画範囲の指定

number;配列 u の各方向のサイズ

u;2次元配列もしくは1次元配列を2次元配列化\*した配列

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

## - g\_bird\_view\_3D 関数の説明 -

2 次元配列 u に対して鳥瞰図を描画する。 $y_{top}=y_{bottom}$  とすると y 方向のスケーリングをせず,値をそのまま反映する。(2 次元配列化\*に関しては前章をお読みください。)

#### 4.6.4 g\_bird\_view\_f\_3D

-g\_bird\_view\_f\_3D関数-

void g\_bird\_view\_f\_3D(

double x\_left, double x\_right,
double y\_bottom, double y\_top,
int number\_x, int number\_y,
double \*u, G\_BOOL WIRE, G\_BOOL FILL);

x,y,z;描画範囲の指定

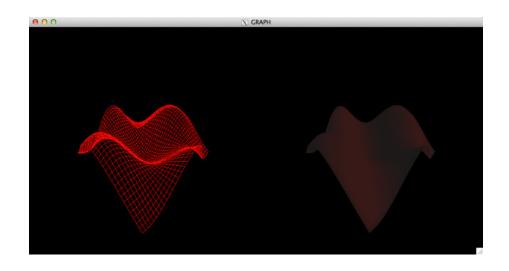
number;配列 u の各方向のサイズ

u :1 次元配列を 2 次元配列化\*した配列

Wire; G\_YES:枠線を描く, G\_NO:枠線を描かない Fill; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

## - g\_bird\_view\_f\_3D 関数の説明 -

1次元配列 u に対して鳥瞰図を描画する。 $y\_top=y\_bottom$  とすると y 方向のスケーリングをせず,値をそのまま反映する。(2 次元配列化\*に関しては前章をお読みください。)



#### 4.6.5 g\_isosurface\_3D

-g\_isosurface\_3D関数 -

x,y,z;描画範囲の指定

number;配列 u の各方向のサイズ

u;3次元配列もしくは1次元配列を3次元配列化\*した配列

height;等値面を描きたい値

#### - g\_isosurface\_3D 関数の説明 -

3次元配列 u に対して与えられた高さ height の位置でマーチングテトラヘドン法を用いて、等値面を描画する. (フラットシェーディングのみサポートしている. フラットシェーディングはメモリ使用量が増大するため機能しない. 3次元配列化\*に関しては前章をお読みください.)

#### 4.6.6 g\_isosurface\_f\_3D

-g\_isosurface\_f\_3D 関数 -

x,y,z;描画範囲の指定

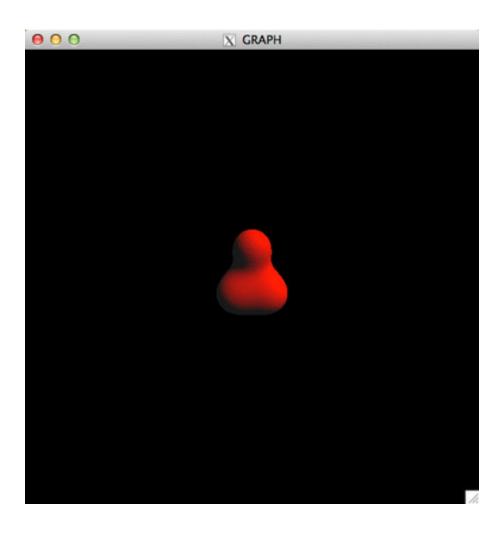
number;配列 u の各方向のサイズ

u;1次元配列を3次元配列化\*した配列

height;等値面を描きたい値

## - g\_isosurface\_f\_3D 関数の説明 -

1次元配列 u に対して与えられた高さ height の位置でマーチングテトラヘドン法を用いて、等値面を描画する. (フラットシェーディングのみサポートしている. フラットシェーディングはメモリ使用量が増大するため機能しない. 3次元配列化\*に関しては前章をお読みください.)



# 5 Version の履歴

2016 5.12 Ver 2.2.1

・G\_Font\_id,G\_WIRE,G\_FILL,G\_BOOL を define において直接数値を与えるように変更した。 (岡本、秋山)

2016 4.26 Ver 2.2

- g\_text **系関数を刷新**.
- ・static ライブラリ (\*.a) と shared ライブラリ (mac なら\*.dylib, Linux なら\*.so) を同時に生成するように変更

2016 4.14 Ver 2.1.1.1

• g\_fan\_2D **の**バグを修正

2015 4.15 Ver 2.1.1

• g\_data\_plot, g\_isosurface, g\_bird\_view のバグを修正

2015 4.13 Ver 2.1

- ・オフスクリーンレンダリングを実装
- Manual を更新 (岡本)

2014 12.4 Ver 2.0 **(全員)** 

- ・ほとんどすべての関数の実装を見直した。
- ・遠距離並び替え型透明化処理を正式にサポート
- Manual を更新

2014 10.16 Ver 1.13

• Manual を更新 (秋山)

2014 10.16 Ver 1.13-experimental

- Manual を更新
- ・視点位置の内部的な計算方法を改善
- gluPerspectinve の引数 (fovy, z\_near, z\_far) を変更 (平芳)

2014 10.14 Ver 1.12

- Ver1.12-experimental の変更点を採用
- manual の付録を Tex に書き換え (未完成)
- ・後方互換性がないので注意してください (平芳)

2014 10.3 Ver 1.12-experimental

- ・3D 版と 2D 版で同じ機能を提供する関数を統一
- ・3D 版しか存在しない関数から 3D 表示を削除

破壊的な変更のため、experimental で評価を待ちます (岡本)

2014 10.3 Ver 1.11 C++ 対応、及び gcc 対策のための雑多な修正

- g\_init\_3D g\_init\_3D\_core の char\* 型引数を const char \* 型に
- ・変数長配列が c++ 利用時には削除されるように

#### その他の修正

- ・G\_INPUT 構造体を削除
- ・マニュアルの g\_init\_3D\_core を修正 (岡本)

2014 9.16 Ver 1.10 g\_bird\_view を改良 (malloc を使わないプログラムに改変) g\_rectangle\_3D の法線ベクトルの向きを修正 (平芳)

2014 9.8 Ver 1.09 g\_text\_standard **の追加** 

マニュアル(付録)の更新(平芳)

2014 9.4 Ver 1.08 g\_def\_scale\_3D\_core の追加 (画面上方向の指定を可能に)

font のデフォルト値を設定

マニュアル(付録)の更新(平芳)

2014 8.13 Ver 1.07 g\_init\_3D, g\_init\_3D\_core の引数の win\_pos,width,height をdouble 型から int 型に変更

g\_bird\_view\_f\_3D, g\_contln\_f\_3D, g\_data\_plot\_f\_3D を作成し, test\_program に使用例を追記

マニュアル(付録)の更新(平芳)

2014 8.11 Ver 1.06

g\_input.c を正式に追加. ASCII 文字に加えて、ファンクションキー、矢印キーなどの特殊キーを入力可能.

マウス入力に対応. 最後にクリックされたポイントを入手可能.

G\_INPUT\_STATE g\_input\_state(G\_KEY\_CODE code, int \*x, int \*y) 入力データの取得 詳しくはマニュアルで (岡本)

test\_program に g\_input\_state の使用方法を追記(平芳)

2014 7.28 Ver 1.05-experimental

g\_input.c を仮追加. ASCII 文字を入力出来るように.

void g\_input\_init() 入力機構の初期化

G\_INPUT g\_get\_input() 入力データの取得

G\_INPUT\_STATE g\_input\_state(G\_INPUT in, unsigned char key) key に対応するキーの情報を取得。G\_INPUT\_STATE 列挙体の詳細は g\_input.h で

Sample\_g\_input を追加. 上記の分のサンプルコード.

g\_text\_3D/2D\_virtual を変更. printf 形式でのフォーマットを使えるように.

glsc3d.h に M\_PI の定義を追加. M\_PI が定義されていない環境 (CentOS とか) に対応するように.

尚, long double の精度が環境依存なので、四倍精度にも対応出きるように 36 桁定義. experimental 取れたらマニュアル更新します. (岡本)

2014 6.27 Ver 1.04 g\_init\_light\_3D\_core **の追加**.

TestProgram を変更.

マニュアルを更新. (平芳)

2014 6.27 Ver 1.03 g\_cls\_3D内のglutMainLoopEventをg\_finish\_3Dに移動.

g\_scr\_color\_3D の引数から不透明度 (a) を削除.

g\_init\_3D\_core で背景色を変更可能にした.

上に伴い、TestProgram と SampleProgram を変更.

g\_rectangle\_3D の direction のバグを修正.

g\_contln\_2D の線が途切れる問題を修正.

マニュアルの更新. (平芳)

2014 6.27 Ver 1.02 g\_isosurface\_f\_3D を作成した. TestProgram も作成した. マニュアルへは記載していない. (秋山)

2014 6.24 Ver 1.01 TesProgram に RunAllSample スクリプトを追加. glsc3d.h を c++ にも対応可能にした. (秋山)

2014 6.22 Ver 1.0 マニュアルを更新 (平芳)

2014.6.x GLSC3D version 1.0 完成

## 6 おわりに

GLSC3D は gnuplot ような便利さも無ければ、OpenGL のように 3D オブジェクトに対して、詳細な属性設定をすることもできません。しかしながら、その分コーディングが簡素となり、あなたが思い描くことは何でも表現できます。本マニュアルを熟読し、サンプルプログラムを参考にしながら使用してください。

新関数やライトの上限を増やしてほしいなどの要望,またはバグを発見した場合は秋山正和\*37までご連絡ください.

論文や学術研究会などでも本ライブラリを使用された際は、その旨を記載してください。開発 の励みとなります。

本ライブラリを改変し、再配布することは禁止しません。しかしながら、その場合には私へメールでご報告ください。また使用者から私へ改善要求や不満などが来ることが無いように配慮していただければ幸いです。また科学技術のさらなる発展のために作成したライブラリですので、有料化などの行為はおやめください。

## 7 謝辞

GLSC3D 開発プロジェクトは科学研究補助金 (科研費) 新学術領域研究 (研究領域提案型) 「生物の3D形態を構築するロジック (15H05857)」および若手研究 (B)「平面内細胞極性に関する統一的数理モデルの構築 (15K20835)」の助成を受けている.

 $<sup>^{*37}</sup>$  akiyama@es.hokudai.ac.jp ですが、未来永劫このメールアドレスが使用可能かは不明です...

# 8 作者の覚書

### 8.1 新関数の追加方法

- 新関数を作る際は、Src のプログラムをよく見て他に倣って作成すること.
- 作成したプログラムが正常に動作するかを確認するために、TestProgram フォルダにて関数のテストプログラムを作成すること。

### 8.2 Manual の作成方法

- Manual フォルダに隠しフォルダがあるので、そのフォルダ内を見ること.
- Canvas.key には絵が沢山あるのでそれをみること.
- Figures には eps ファイルがあるが、そのファイルは jpg2epsconverter をうまく使えば楽に作成できる。

## 8.3 設計上の基本原則

GLSC3D の関数は、大きく分けて二つの関数が存在します。常用関数とコア関数です。コア関数は大量の引数を要求する代わりに、ユーザーにより高度な選択肢を提供します。例えば描画関数多くは、ユーザーはコア関数を用いることで、描画の質と実行速度のトレードオフに関与することが出来ます。常用関数は逆に、一般的でないと思われる選択肢を隠蔽することで、より使いやすいよう、関数の引数を最小限に留めています。

現在,常用関数はコア関数のアダプタにすぎません。内部では適切なパラメータをしてコア関数を呼び出しています。つまり、同等な引数を設定する場合、性能的な差はほとんどありません。 関数呼び出しが増える分、理論的には常用関数の方が僅かに劣った性能を持つと考えられます。

今後の更新においても、一つの例外を除いてこの構造は継承されるべきでしょう。一つの例外とは、実装言語が C 言語から、関数オーバーロードや引数のデフォルト値などの機能を備えたより先進的な言語に切り替えられた場合です。この場合、引数の多寡によって関数名を切り替える必要はありません。

しかしながら、その場合にも、C言語から呼び出し可能な構造は維持すべきです。なぜなら、ユーザーは数値計算の専門教育を受けていることが想定されますが、プログラミング全般に対してはそうではありません。また、現在、数値計算の教育ではC言語の使用を前提としていることが多いと考えられます(あるいはFORTRAN!)。また、C言語は内部的にも比較的単純な構造を持つため、他の言語からも比較的容易に呼び出すことが出来ます。即ち、C言語から呼び出し可能な構造を維持することで、他の多くの言語からも呼び出し可能となります。

## 8.4 ファイル構成

git を用いて最新版を入手することが出来ます。ただし、サーバーは動的数理モデリング研究室内にしか公開されていません。

開発版は LatestVer です. これは開発のため不安定になり得ます. 最新の安定版は GLSC3DVerXXXX で、XXXX が最も大きいものです. これは安定して使用することができます.

ソースコードは Src/Source にあります. インクルードファイルは Src/Include です. Src で make を行うと、Src/Object にオブジェクトファイル、Src/Depend に依存関係ファイルが生成され、最終的に Out に公開用のファイルが生成されます. 通常、Src/Source にファイルを追加しても Makefile を書き換える必要はありません.

ユーザーは Src で make した後, Out 以下のファイルを適切な位置にコピーする必要があります. これを自動化するスクリプトは現在存在しません.

TestProgram 以下に各種サンプルコード, SampleProgram 以下にデモプログラムが存在します. 開発者は新たな関数を公開する場合, 対応したサンプルコードを追加して下さい.

Manual 以下にはマニュアルが存在します。あなたが読んでいるこのマニュアルは、おそらく Manual/GLSC3D\_Manual.pdf でしょう。開発者は、Manual/.TexManual 以下を見て下さい。新たな関数を公開する場合、GLSC3D\_Manual.tex にその関数の情報を追加してください。書式等はすでにある関数のものをテンプレートにして下さい。画像は Figure/eps 内に追加して下さい。

### 8.5 描画処理

GLSC3D はある程度の透明化処理をサポートしています。このため、全ての三角形描画は一旦保持され、最終的に視点から重心までの距離を用いてソートされます。このため、今後追加される描画関数は全て、このプロトコルに従うべきです。即ち、

- g\_triangle\_3D(\_smooth)(\_core)(\_s) 関数
- g\_triangle\_3D\_smooth\_worker 関数
- g\_triangle\_3D\_flat\_worker 関数

のどれかを用いて描画するべきです.

#### 8.6 Future Works

- 1. テキストのサイズとフォントを個別に指定.  $\rightarrow$ Ver2.2 で実装!
- 2. 日本語表示. →Ver3.0 で実装!
- 3.3次元描画における線の問題を解消.
- 4. オフスクリーンレンダリング. →Ver2.1 で実装!

- 5. g\_def\_scale を自動化.
- 6. triangle buffer を動的に変化.
- 7. オフスクリーンレンダリング時, 通常とキャプチャーしたファイルサイズが食い違います. g\_off\_screen.c/g\_init\_off\_screen\_rendering 内で用意しているバッファが原因かもしれません. 書き出される画像は肉眼では違わないように見えます.
- 8. C の多次元配列を内部的に呼べるが、配列が転置されて表示されます。従って、将来的に はそのような関数は消します。
- 9. OpenGL の最新規格への対応. シェーダの実装. バーテックスシェーダとフラグメント シェーダを OpenGL の glShaderSource 関数を用いて呼ぶことができる, 従って, 三角 形を描画する場合にはこの関数を通してラップすれば GLSL への対応が可能となるはず.
- 10. g\_isosurface.c のコードを書き直す
- 11. 線分と三角形が混じるとき極端に遅くなる